

京都府埋蔵文化財情報

第97号

椿井遺跡の調査と山城の高地性集落	-----	高野 陽子	-- 1
共同研究 古墳時代集落の圍繞施設について	-----	小池 寛	-- 7
案察使遺跡出土の縄文土器に関する科学分析	-----	中川 和哉	-- 17
平成17年度発掘調査略報	-----		25
1. 車塚遺跡第7次(A・B地点)			
府内遺跡紹介 103. 園部城跡(園部陣屋跡)	-----		29
センターの動向	-----		31

2005年9月

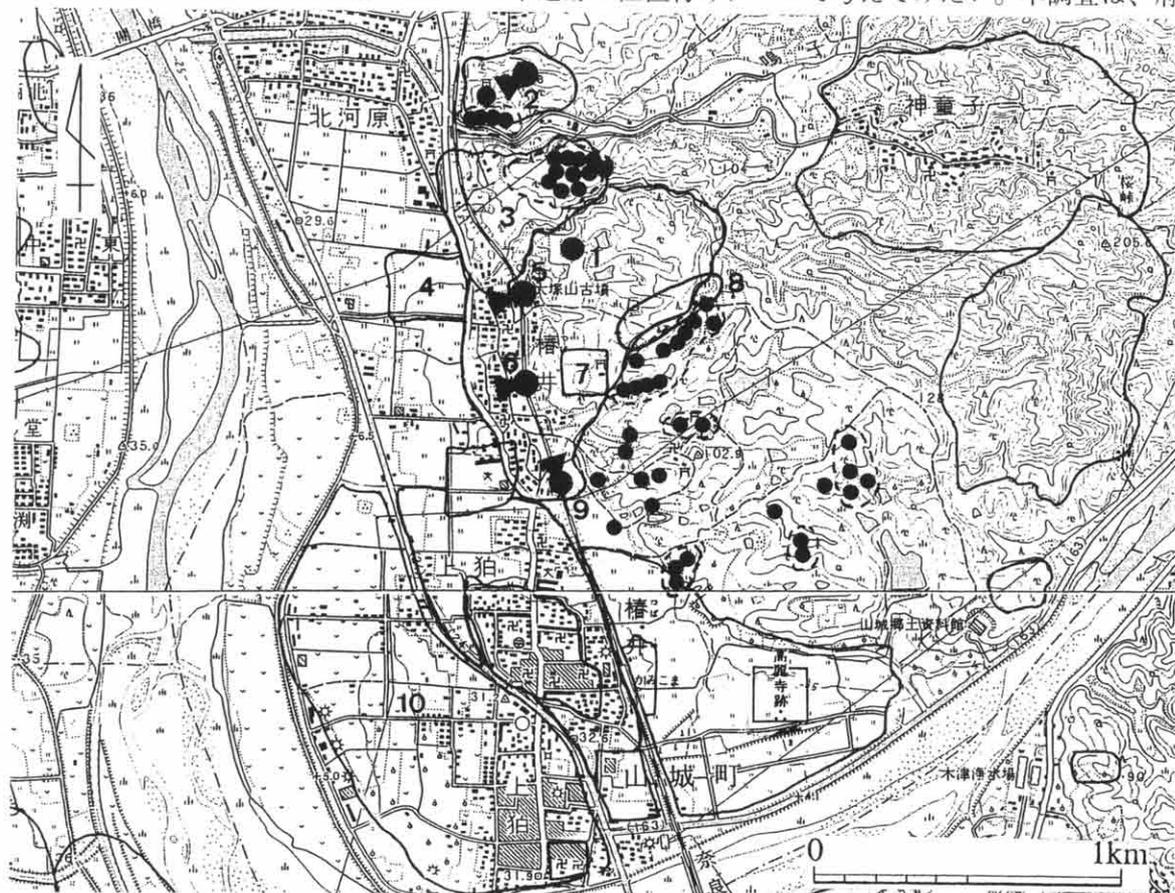
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

つばい 椿井遺跡の調査と山城の高地性集落

高野 陽子

1. はじめに

椿井遺跡は、京都府相楽郡山城町に所在する縄文時代～近世の複合集落遺跡である。遺跡は、木津川東岸の中位段丘面に形成されたもので、平地との比高差標高30m以上を測る。今回の発掘調査では、後述するように、弥生時代後期の竪穴式住居跡2基や土坑を検出し、いわゆる高地性集落の一つとしてとらえられることが明らかとなった。遺跡の周辺には、三角縁神獣鏡が大量に出土したことで知られる椿井大塚山古墳(全長175m)や、これに後続する平尾城山古墳(全長110m)など、古墳時代前期前半の大形前方後円墳が分布し、山城南部の古墳出現前夜の地域社会を考える上で極めて興味深い資料といえる。なお、本稿ではこうした調査成果を紹介するとともに、山城地域における高地性集落のなかでの本遺跡の位置付けについて考えてみたい。本調査は、府



第1図 椿井遺跡と周辺主要遺跡(国土地理院1/25,000田辺・奈良)

1. 椿井遺跡(調査地)
2. 平尾城山古墳
3. 堂ノ上遺跡
4. 坂ノ下遺跡
5. 椿井大塚山古墳
6. 天上山古墳
7. 松尾廃寺
8. ムナガイ遺跡
9. 御霊山古墳
10. 上粕西遺跡

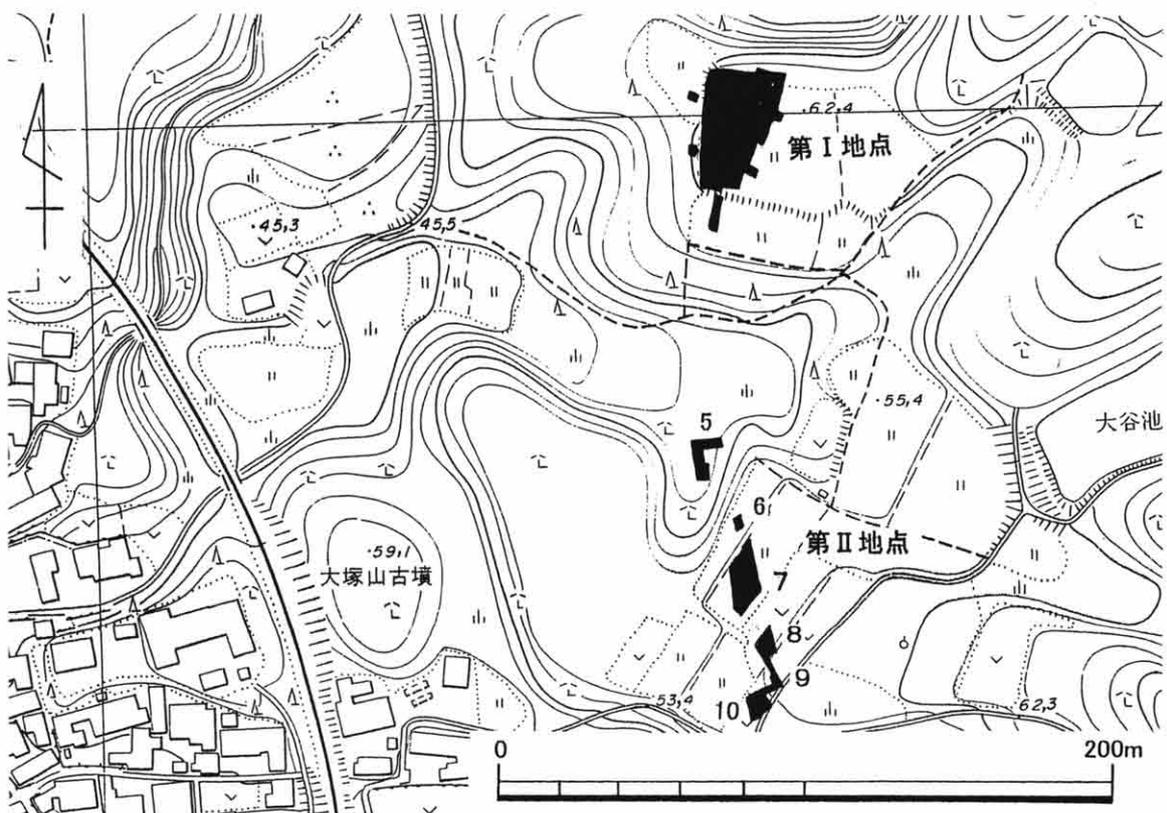
営農免農道整備事業に伴い、京都府山城土地改良事務所の依頼を受け、平成16年度(第1次調査)と平成17年度(第2次調査)に、計約1,200㎡を対象として実施したものである。

2. 椿井遺跡の調査

今回の調査では、まず遺構・遺物の有無を確認するために道路計画路線帯の南北約200mの間で試掘調査を実施し、その成果をもとに本掘を実施した。対象地は、谷部を挟むため、谷部の北側の区域を第Ⅰ地点、南側の区域を第Ⅱ地点とした(第2図)。

第Ⅰ地点は、第1～4トレンチを含み、約890㎡を対象として調査を実施した(第3図)。主な検出遺構は、竪穴式住居跡2基、掘立柱建物跡1棟、土坑群、溝などである。

竪穴式住居跡SH22(第4図) 第1トレンチ北端で検出した円形住居跡である。規模は、直径約9.2mを測る。住居の床面から、支柱穴や土坑のほか、円形に巡る周壁溝を検出した。周壁溝が2重に巡ることや、支柱穴の数と位置から、住居はほぼ同じ位置で建て替えが行われ、規模を拡大していることが判明した。柱構造は、対角線上に位置する4基の柱穴を支柱穴とするものである。建て替え後も柱構造は踏襲されるが、東西の各辺におおよそ直交する位置に、支柱穴と同様の深さをもつ柱穴を検出しており、建て替え後は屋内に棟持柱をもつ入母屋構造が採用されたとみられる。住居床面では、南側の壁寄りで2基の円形の土坑が接するように検出された。その上面に方形の浅い掘り込みを設けるもので、上板などで蓋をする構造の貯蔵穴とみられる。この土坑もまた、建て替えによって再掘削されたと推定される。土坑内からの出土遺物は乏しく、



第2図 椿井遺跡トレンチ配置図

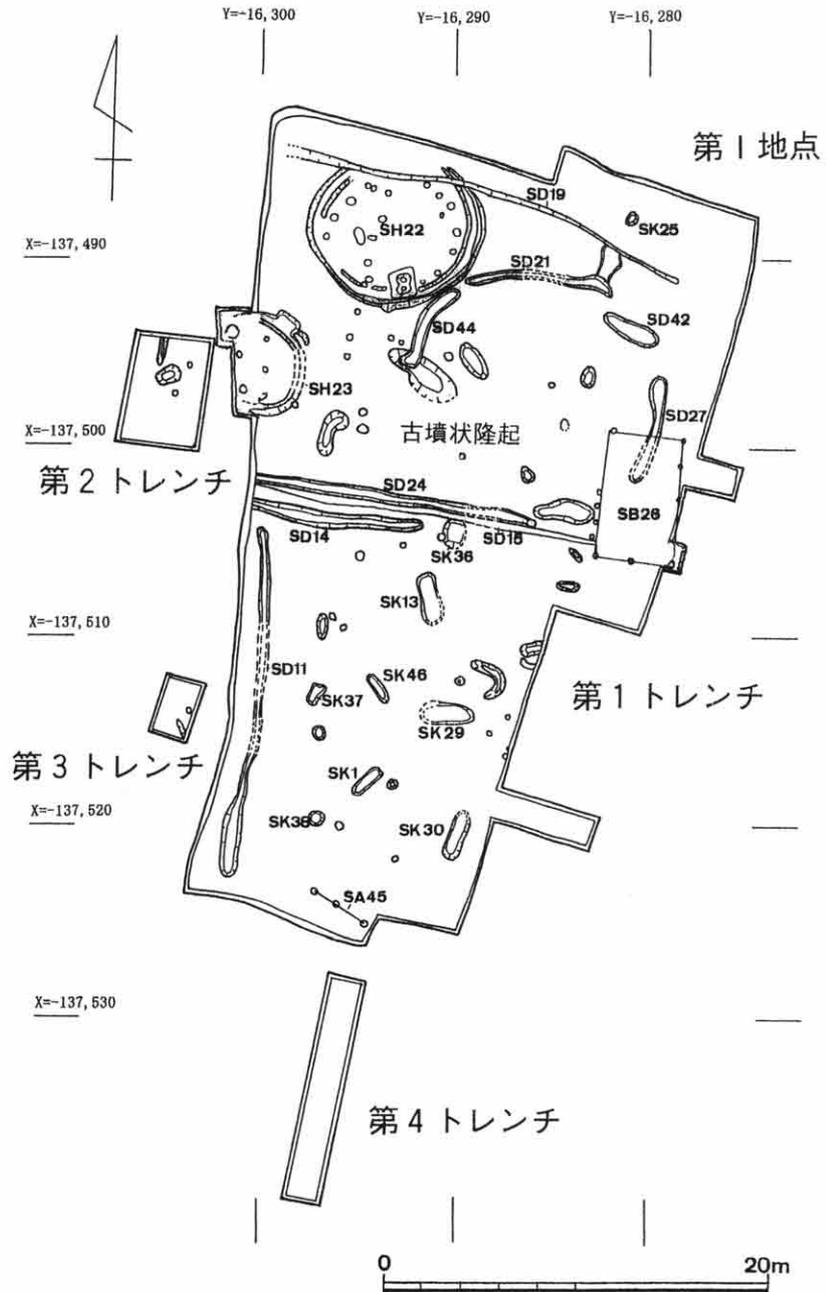
わずかに土器片が出土した。床面からは、弥生土器のほか、粘板岩製砥石や砂岩製敲石(第5図4)、チャート製の石核などの石製品が出土した。遺物の多くは地盤を削り出した床面直上から出土しており、貼り床は施されなかったものとみられる。また、床面には、被熱して赤変した部分は認められず、炉の痕跡を認めることはできなかった。出土遺物のうち、壺の体部片にはベンガラとみられる赤色顔料が付着しており、赤彩土器と推定される。また、敲石にも赤色顔料の付着が認められた。出土土器から、おおよそ弥生時代後期中葉後半の資料とみられる。

竪穴式住居跡SH23 第1トレンチ北部に位置する円形住居跡である。床面の西側約1/2は、後世の削平を受けていたが、東側の床

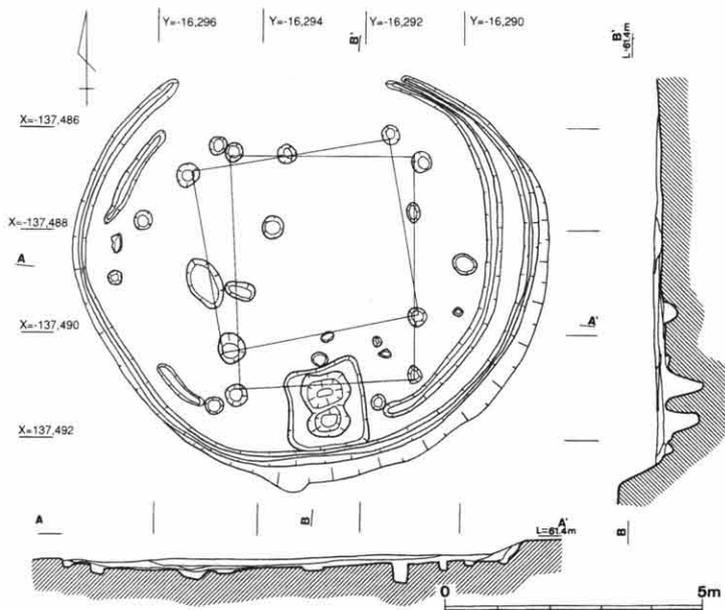
面はよく遺存していた。規模は、直径約5.6m、深さ約0.25cmを測る。床面から、周壁溝と支柱穴を検出した。また、北東側に土坑状の落ち込みを検出しており、住居の入り口に対応する部分である可能性がある。出土遺物は、床面から、ほぼ完形の壺形土器1点(第5図1)が出土した。出土した土器から、弥生時代後期中葉～後葉の住居跡と推定される。

土坑SK1 第1トレンチ南部で検出した方形の土坑である。規模は、約2.0×0.6m、深さ0.4mを測る。埋土の中位から、弥生土器片が出土した。土坑の形状から、弥生時代の埋葬施設の可能性が高いと考えられる。

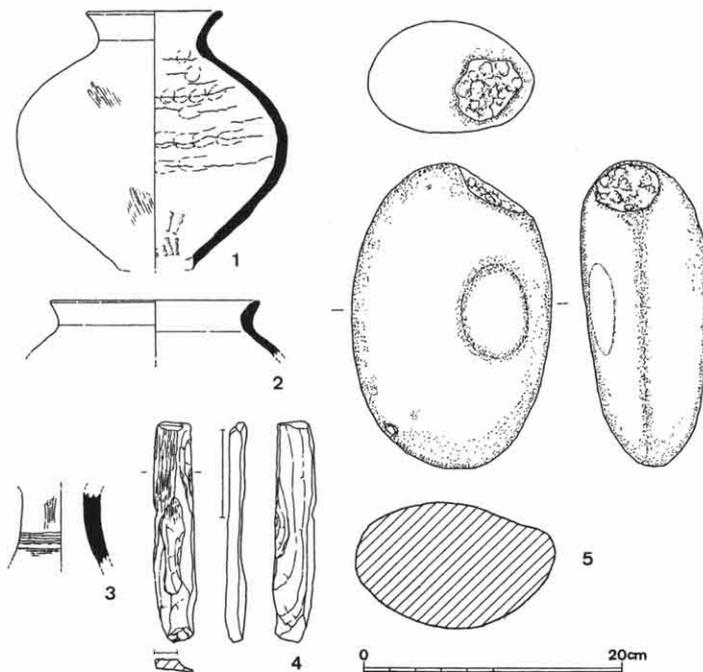
土坑SK25 第1トレンチ北端で検出した円形の土坑である。規模は径約0.7mを測る。土坑内から特に遺物は認められなかったが、焼土や炭化物が多く出土した。床面は赤変しており、長



第3図 椿井遺跡第I地点遺構配置図



第4図 椿井遺跡竪穴式住居跡SH22実測図



1. 竪穴式住居跡SH23 2~5. 竪穴式住居跡SH22

第5図 椿井遺跡出土遺物

Ⅱ地点の調査では、6地点(第5~10トレンチ)で試掘トレンチを設定し、一部を拡張して本掘を行ったが、路線予定地内は後世の耕作によって大きく削平されており、弥生時代の遺構としては、幅約0.7m、深さ約15cmの浅い溝1条を部分的に検出したに留まる。

3. 山城の高地性集落

高地性集落とは、「水稻栽培や日々の居住条件に不相当か不可能な、水田農民にとっていわば異状ともいえる高所を占地した集落」とされる^(注1)。平野部との比高差25m以上を測る高所の集落を

時間にわたって被熱を受けた可能性が高いと考えられる。弥生時代の焼土坑の可能性があるため、出土した炭化材の放射性炭素年代分析(AMS分析法)を進めている。

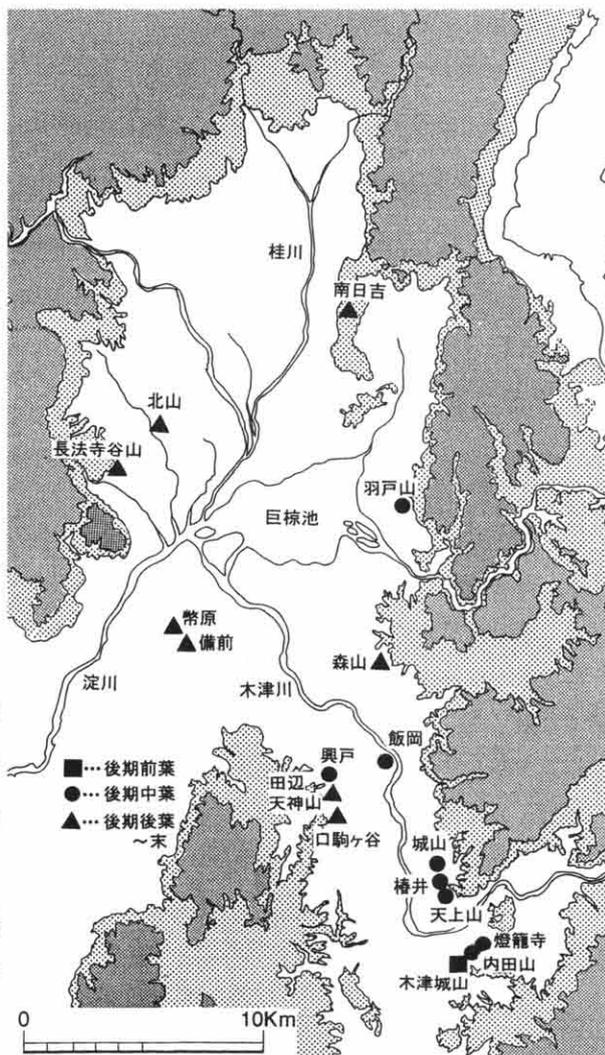
このほか、第Ⅰ地点では、中津式併行期の縄文時代の土坑1基を検出したほか、第1トレンチ北東で、溝SD21・27・44などに囲まれる径約12mの古墳状隆起を検出した。中央部はすでに大きく削平されており、埋葬施設などは検出していない。この古墳状隆起の南側では、規模一辺1.2mを測る方形土坑SK36を検出したが、ここでは古墳時代後期と推定される長頸の鉄鏃が出土した。また、第1トレンチで検出した掘立柱建物跡SB26は、4間×2間、桁行約6.6m、梁間約3.6m、柱間約1.5~1.8mを測る建物跡である。遺物が出土しておらず時期を明確にできないため、柱穴の埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代分析を進めている。溝SD11・15・24は、陶磁器片や寛永通寶が出土しており、中世後期~近世の溝であることが判明した。

仮に広義の高地性集落とすれば、山城地域の高地性集落は、散布地を含めると約20例を数えることになり、今回調査を行った椿井遺跡もその一つに数えることができる。その存続時期は、山城南部の弥生時代前期の遺物が散布する木津町赤ヶ平遺跡や中期前半の方形周溝墓や土坑などを検出した同燈籠寺遺跡を除き、ほとんどが後期を中心とするものである(第6図)。

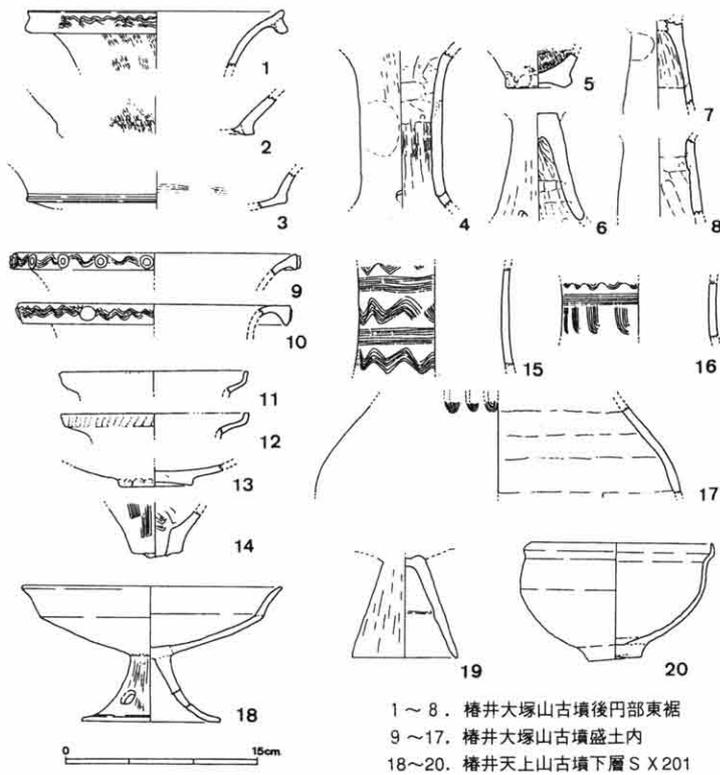
後期の高地性集落を概観すると、まず後期前葉は、山城地域全体で遺跡数は少なく、木津町木津城山遺跡をあげられるのみである。木津城山遺跡は、後期前葉を中心とした竪穴式住居跡39基を検出した大規模な高地性集落である。後期中葉は、巨椋池周辺では、竪穴式住居跡1基を検出した宇治市羽戸山遺跡をあげるにすぎないが、南東部では、山城町から木津町域にかけての木津川東岸の丘陵上に、多く営まれている。椿井遺跡のほか、椿井大塚山古墳下層遺跡、椿井天上山遺跡下層遺跡、城山遺跡、木津町燈籠寺遺跡、同内田山遺跡などの例がある。一方、後期後葉～末には、高地性集落の分布域は大きく変化し、巨椋池を囲む丘陵地帯に相次いで出現するようになる。その例として、八幡市弊原遺跡、同備前遺跡、城陽市森山遺跡のほか、東山丘陵では京都市南日吉遺跡、乙訓地域では長岡京市北山遺跡、同長法寺谷山遺跡などがあげられる。

山城の高地性集落の立地は、後期前半には「南方を意識した布陣」^(注2)と伊藤淳史氏が指摘するよ

うに、山城町から木津町の木津川中流域においては、特に後期中葉に相次いで出現する。椿井大塚山古墳の調査で出土した築造前の土器とされた弥生土器のほとんどは、弥生時代後期中葉の所産であり(第7図)、周辺の丘陵部では、後期中葉を中心に、高所に集落が大きく展開する可能性が高い。西日本における後期の高地性集落が、後期初頭と後期後葉～末にピークがあるとされるなかで、やや時期を違えて展開している点は注意されることである。周辺では、同時期に山城町上狛西遺跡などの低地部の大規模集落が出現し、高所の集落とその機能を分化させていると考えられることや、防御性の高い「V」字形の溝が掘削される椿井天上山古墳下層遺跡の例などもあり、集落の性格を考えるうえでは、防御的・軍事的機能がまず重要である。一方で、木津町域の遺跡など、山城南東部では平野部から緩斜面で連続的に繋がる集落も多く、防御性が必ずしも高い事例ばかりではないことから、平野部が乏しいうえに、木津川の氾濫



第6図 山城の高地性集落



1～8. 椿井大塚山古墳後部東裾
9～17. 椿井大塚山古墳盛土内
18～20. 椿井天上山古墳下層 S X 201

第7図 椿井大塚山古墳・椿井天上山古墳下層遺跡の土器

原が大きく、居住の適地が限られるという地理的要因も考慮する必要があるだろう。

山城の高地性集落は、後期後葉～末において、山城南部から一転して、山城中部の巨椋池を囲む丘陵地帯に相次いで出現する。こうした背景には、後期後葉以降、淀川－巨椋池－琵琶湖を結ぶルートが東西交通の基幹路としての重要性を増したことが影響していると考えられる。新たな高地性集落は、乙訓地域や、その対岸の八幡地域の丘陵に出現することから、主に西側地域からの人の移動・流入によって、この地域の社会的緊張が増幅したものであろう。山城では、

従来、後期の地域間関係は、土器様相から近江との関係性が重視されてきたが、近年調査された佐山遺跡^(注3)では、吉備から播磨を中心に広がりを見せる、中央土坑の周縁に土堤をもつ住居の検出例があり、西方地域、特に播磨との人的交流が窺える資料がみられる。高地性集落の立地と出現時期には、地域間関係の変化が大きく影響していることは明らかであり、今後特に西側地域との関係性が注意されねばならないだろう。

(たかの・ようこ＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 小野忠熙「高地性集落の概念」(小野忠熙編『高地性集落跡の研究』 学生社) 1979

注2 伊藤淳史「山城地域における弥生集落の動態」(『みずほ』第32号 大和弥生文化の会) 2000

注3 高野陽子編「佐山遺跡」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』第33冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

参考文献

近藤義郎編『椿井大塚山古墳』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第3集) 1986

中島正編『椿井大塚山古墳』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第21集) 1999

島軒満『椿井天上山古墳』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第26集) 2001

森岡秀人「弥生集落研究の新動向(Ⅲ)」(『みずほ』第32号 大和弥生文化の会) 2000

河野一隆「南山城地域の高地性集落－一般地方道八幡線関係の発掘調査から－」(『埋蔵文化財情報』第66号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

古墳時代集落の圍繞施設について

小池 寛

1. はじめに

弥生時代の集落には、集落全体を不整形な環濠によって圍繞する事例が多い。このような防御を目的とする環濠集落は、『魏誌倭人伝』に記載された「倭国大乱」が終息する時期である古墳時代初期には消失することが、考古学的には概ね把握されている。

一方、弥生時代中期後半には北部九州を中心に集落内の主要施設を圍繞する方形区画溝の存在が確認されるようになり、集落を構成する一般成員の居住施設から首長の居住施設を区別しようとした施設が、一部の遺跡において確認されている。これらの方形区画溝こそが、古墳時代前期以降に巨大化する首長の居館へと徐々に受け継がれていったと考えられる。

本稿では、古墳時代中期に焦点をあて、首長が居住する掘立柱建物跡群などの諸施設の圍繞方法について、整理することを目的としている。

2. 古墳時代前期の集落を圍繞する溝について(第1図)

群馬県三ツ寺遺跡に代表される古墳時代中期の有力者の居館は、古墳時代中期にたって生成されるのではなく、古墳時代前期から徐々に発展した結果であると考えられる。

ここでは、まず、古墳時代前期の圍繞施設について概観し、古墳時代中期の圍繞施設が生成される背景を見ておきたい。

古墳時代前期の首長の居宅を圍繞する施設としては、方形を基本とする区画溝や柵などが主要な施設である。京都府森山遺跡では、幅約5mの区画溝が、36m×45mの範囲にめぐらされている。圍繞された側はすでに削平を受け、大型建物跡などは確認されていないことから、溝の掘削土によって台状に盛り上げられていた可能性が高い。この施設の周辺では、同時期の竪穴式住居跡が多数確認されており、圍繞された首長の居館は、他の一般成員が居住する集落内から隔絶されることなく、併存していたと考えられる。

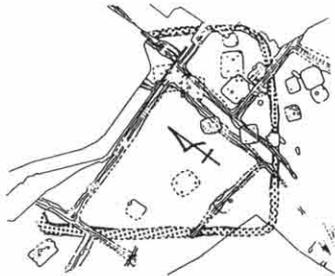
静岡県大平遺跡では、33m×40mの範囲を圍繞する柵が確認されており、同県土橋遺跡の区画溝は、主要施設を圍繞する溝の西辺が直線的に掘り込まれているものの、北辺及び東辺は湾曲している。特に、溝と溝の屈曲部分は、丸く掘り込まれており、明確な設計を背景に掘り込まれたとは想定し難い状況である。なお、溝の内側にもそれと平行して細い溝が掘り込まれており、区

画溝の内側には、堤状の高まりを想定することができる。

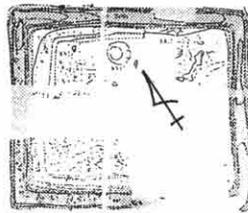
一方、静岡県小深田遺跡では、35m×40mの溝の内側に竪穴式住居跡を中心とする居住施設が存在している。検出された竪穴式住居跡の規模は、平均的な規模であり、傑出した居住施設は確認されていないことから、首長の居館以外の用途も想定する必要がある。なお、東京都赤羽台遺跡では、48m×54mの範囲に幅1.5mの溝がめぐっている。溝の隅部は静岡県土橋遺跡と同じく丸く掘られており、厳格な設計を背景に造営された可能性は低い。

以上のように、古墳時代前期の圍繞施設は、周辺に竪穴式住居跡が存在する 경우가多く、集団を構成する一般成員の居住空間から隔絶されていないという共通点が指摘できる。また、区画溝

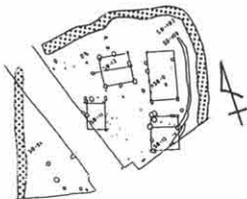
は、長方形が多く、規模は、40～50mの溝が多く見られる。また、圍繞された内側には、大規模な竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などは必ずしも確認されていない。



東京都赤羽台遺跡



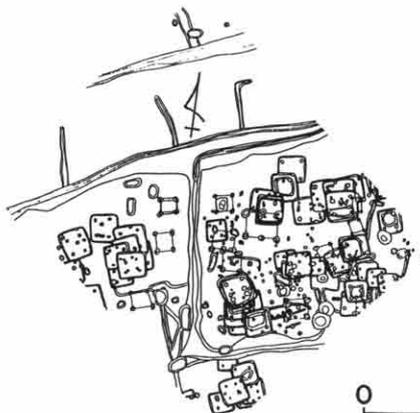
京都府森山遺跡



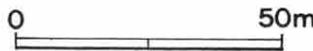
静岡県土橋遺跡



静岡県大平遺跡



静岡県小深田遺跡



第1図 古墳時代前期の圍繞施設

3. 古墳時代中期の集落を圍繞する溝について

古墳時代中期における集落を圍繞する溝の事例は、古墳時代前期に比べ、西日本においても増加している。しかし、数多く発掘調査が行われている古墳時代中期集落において、必ず検出される遺構ではないことから、一般的な集落に多用された施設とは考えにくい状況である。

ここでは古墳時代中期の圍繞施設をもつ集落について概観するが、その属性を研究する上で多くの発見があった京都府森垣外遺跡を典型的事例として概観しておきたい。

森垣外遺跡で検出した掘立柱建物跡群は、総計119棟である(第2図)。成立時期は陶邑編年TK216型式併行期に比定できる礎が柱穴から出土しており、5世紀前半に比定できる。しかし、集落が最も盛行する時期は陶邑編年TK23～47型式併行期である(第3図)。

同遺跡では、一辺46mの圍繞施設内に大型掘立柱建物跡群が造営されている。集落内には3か所に同様な圍繞施設が存在し、一般の居住空間とは隔絶された様相を窺い知ることができる。また、圍繞施設である溝内に堆積する流入土から多量のクワ科－イラクサ科(Moraceae-Urticaceae)の花粉が検出されている。当該草本は、堤に多く群落を形成して生育する植物であり、区画溝と柵とともに堤によっても区画されていることが判明している。なお、区画溝上では、陶邑編年MT15～TK10型式併行期に比定できる竪穴式住居跡を検出しており、区画溝によって圍繞された居住空間は、陶邑編年MT15～TK10型式併行期にはその機能を喪失し、集落自体が解体されていたことを示している。

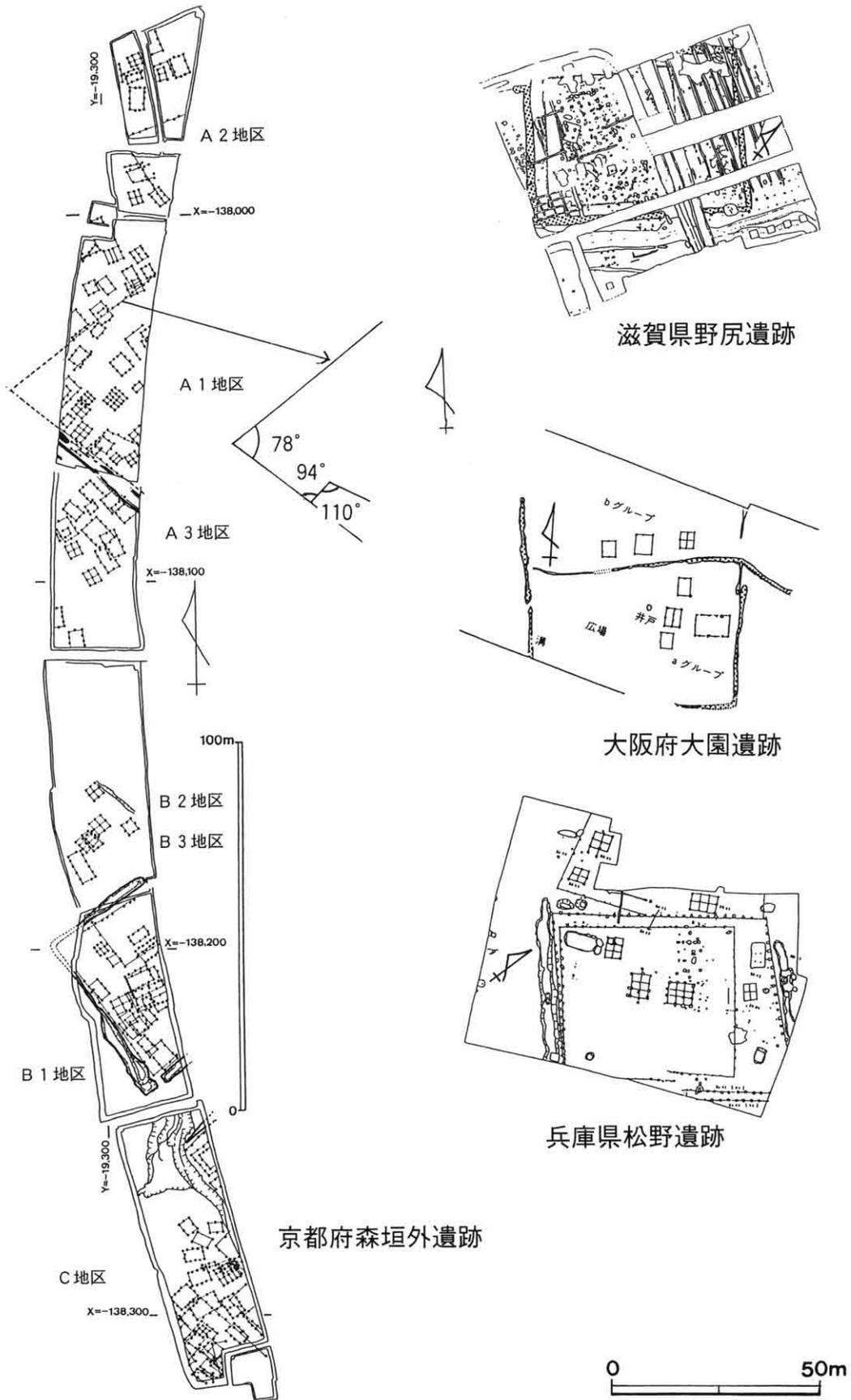
当該遺跡で最も注視すべき遺物として朝鮮半島から搬入された陶質土器がある。完形率の高い縄文土器も出土しており、破片資料の出土は、概ね全地区に広がりを見せている。また、軟質焼成の格子叩き目を有する陶質土器や格子叩き目をもつ韓式系土師器・そして、甑ないしは鍋の把手に篋状工具による切り込みが入る韓式系土師器も出土している。

その他、朝鮮半島系遺物としては、携帯用のために紐を通す穿孔部をもち、扁平な形状を呈する砥石や移動式竈などがあり、それらの出土の意義が当該遺跡の性格を考える上で重要である。

一方、各地区からは相当量の製塩土器が出土している。その多くは細片であるため、形態については不明な点が多いが、和歌山県紀淡海峡付近から搬入された貝殻条痕を内面に有する個体や還元焼成の個体などが確認できる。また、大阪湾岸からの搬入品や、平行叩きを有する中部瀬戸内からの搬入された製塩土器も見られる。製塩土器で得られた塩は、固形塩であり、食用、工作用、宗教的な儀礼用と用途もさまざまであるが、第2次A1地区では、馬歯を埋納したピットを検出していることから、馬の飼育が集落内で行なわれたことが想定できる。馬の飼育には塩は飼料として不可欠であり、大量に出土する製塩土器が、それと密接に関係することも念頭に置かなければならない。

一般的に古墳時代中期の技術革新には、鉄の原材料確保から製鉄、鍛冶による工具などの作製が大きく影響したとされる。それらの工程では、鉄滓が多く生じるため、集落内の鉄滓出土は、鍛冶などが行なわれたことを示す遺物として認識されている。当該遺跡においても、全地区から鉄滓や椀形鉄滓、鞆羽口が出土し、焼土坑も検出していることから、集落内で鍛冶が行なわれていたことを推測させる。鉄製工具を集落内で作製する技術の定着は、生産力向上につながり、周辺域では見られない先進的な技術をもつ集落へと変貌を遂げていく重要な契機であった。

調査区全域で出土する遺物として精巧な鏡形、剣形、勾玉形、白玉などの石製模造品がある。また、滑石原石も多く出土していることから当該遺跡において製作された可能性が高い。石材種から紀伊産の滑石であり、製塩土器の出土との関連も想定できる。一方、粘板岩及び鉄製紡錘車や軽石、土錘、琥珀、緑色凝灰岩製の管玉などの原石、土玉は、集落内の生産力の一端を表して



第2図 古墳時代中期の圍繞施設(西日本)

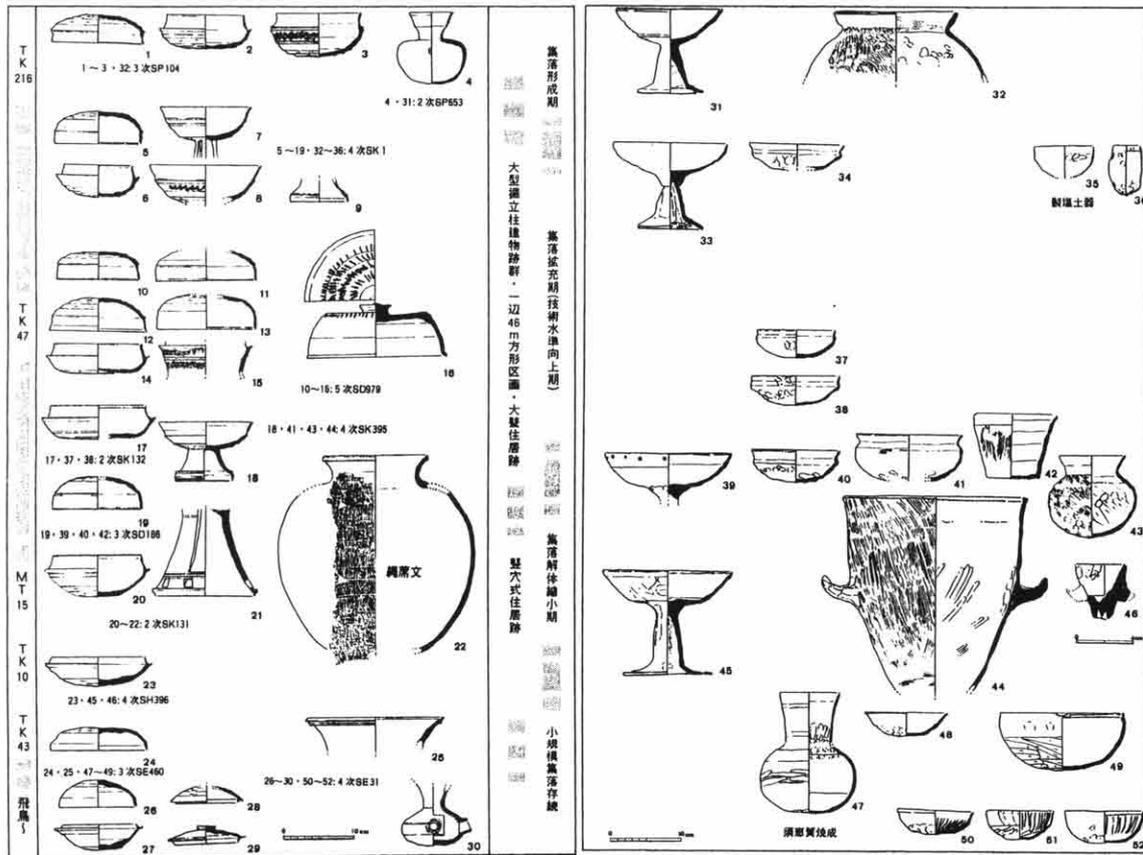
いる。

このように森垣外遺跡では、京都府南山城では類を見ない遺構、遺物を検出しており、古墳時代中期に形成された渡来系技術者集団の参入を確実に捉えられる集落として重要である。古墳時代中期の首長居館の属性研究をすすめる上で基準となる遺構や遺物が出土している。

次に、森垣外遺跡の圍繞施設を見ていきたい。森垣外遺跡の最北部に位置する圍繞施設には複数の溝と柵がある。後述する兵庫県松野遺跡と同じく、柵と柵が直角を保たず78°の角度を有している。また、外角94°、内角119°を測る付属的な圍繞施設も確認されており、その酷似する形状に何らかの共通要素を見出すことができる。直角を計測する技術は、古墳築造においても確認されている。しかし、これら圍繞施設は直角には交差しない点に何らかの原理が存在する可能性がある。

一方、滋賀県野尻遺跡(第2図)では、幅2mを測る溝が40m×50mの範囲にめぐらされており、圍繞された内側には、柱を布掘りによって樹立させた大型掘立柱建物跡が確認されている。南東辺の溝の一部には、掘り残し部分が存在することから、圍繞施設内への入り口を想定することができる。先に述べた森垣外遺跡での区画の溝は、一辺46mであり、当該遺跡で確認された溝と近似している。

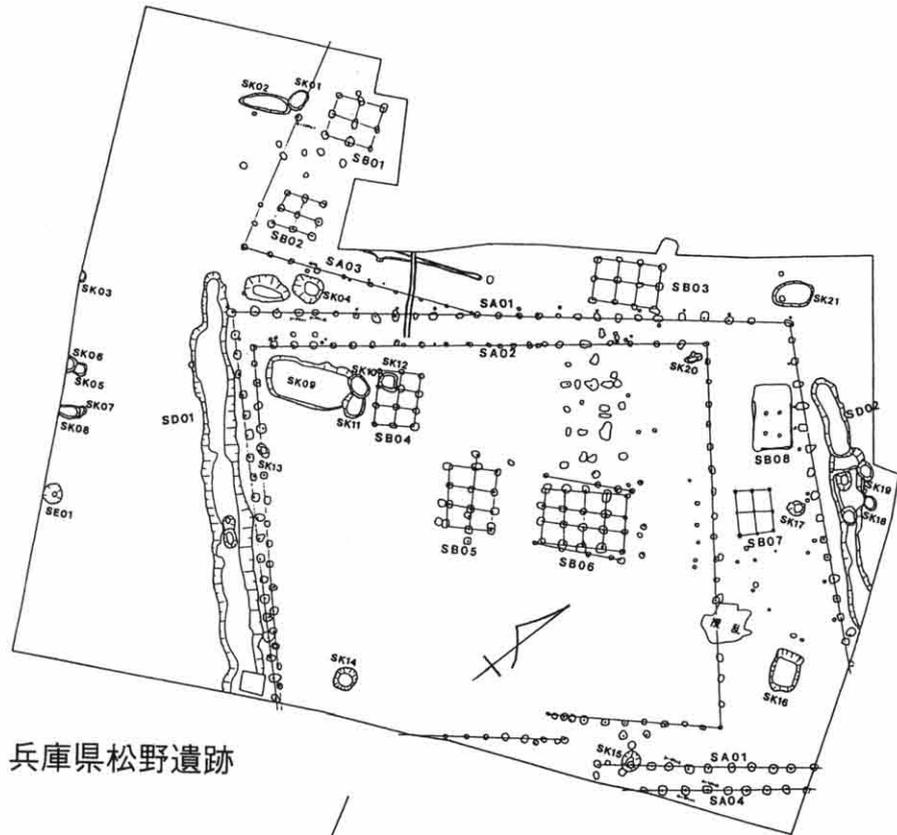
大阪府大園遺跡では、「L」字形に屈曲する溝と蛇行し、東方にのびる溝により圍繞されている。また、南辺から北進する溝は、一部において掘り残し部分を設けており、滋賀県野尻遺跡で



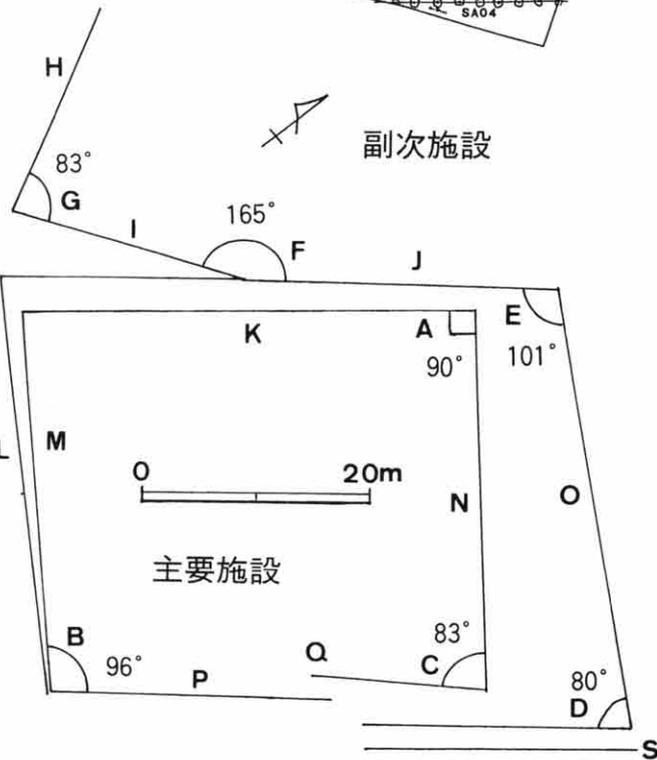
第3図 京都府森垣外遺跡集落変遷図

も見られた入り口である可能性が指摘される。区画溝は、幅が1～2mをはかり、34m×47mの規模をもっている。溝の規模は、先に述べた森垣外遺跡の検出事例に酷似している。

大園遺跡では、圍繞された内側において、小規模な掘立柱建物跡が確認されており、また、北辺の蛇行する溝の北隣接地点においても同様な規模の掘立柱建物跡を検出していることから、複



兵庫県松野遺跡



第4図 兵庫県松野遺跡にみる圍繞施設

数の隣接する圍繞施設が併存していることを示している。なお、溝の形状が直線を呈していないことなどから、先に述べた森垣外遺跡や野尻遺跡とは、異なった要素をもっているが、区画溝の規模は、先に述べた森垣外遺跡の検出例に近似していることから、集落が成立した背景には、渡来人の集落内参入などの共通する要素が見られる。

兵庫県松野遺跡では、今まで述べてきたような簡単な圍繞施設ではなく、溝と柵を複雑に組み合わせた圍繞施設が確認されている(第4図)。その圍繞施設は、他の集落遺跡では見られないことから、その構造について簡単に整理しておきたい。

松野遺跡では、最も外側に幅2mの溝が掘られているが、溝は、北東辺であるO辺と南西辺にあたるL辺の外側にのみ穿たれている。また、柵列は、基本的には二重に設置されているが、外側の柵と内側の柵は、平行しない状態で設置されている。柵と柵の交点の角度は、各々異なっており、明らかに左右対称型を避けるべくして設計された可能性が指摘できる。これらの柵列の基準は、内側の柵であるK辺とN辺の交点であるA角が直角を保っていることから、この地点を基点としていることが認識できる。一方、南東辺では、内側のP辺とQ辺において各々96°と83°の異なった角度で設定することによって、意図的に段差を付け、入り口部を作っており、他の集落遺跡には類を見ない事例である。また、内側の柵であるN辺とO辺は、台形状に東側に開き、土坑や掘立柱建物跡とともに、極端に一边が長い竪穴式住居跡などが確認されている。この空間は、内側の柵列によって圍繞された主要施設とは異なった役割を担っていたと考えることができる。

なお、松野遺跡では、北西辺であるJ辺から165°の角度で西方にのびる区画が存在している。これらの区画についても居館の一部と見られるが、柵が二重でないことや、溝によって区画されていないことなどから、副次的な施設である可能性が指摘できる。

松野遺跡で確認された掘立柱建物跡は、圍繞施設の規模に比べれば、小規模であるが、総柱であることからその一部が倉庫として機能していた可能性は高い。

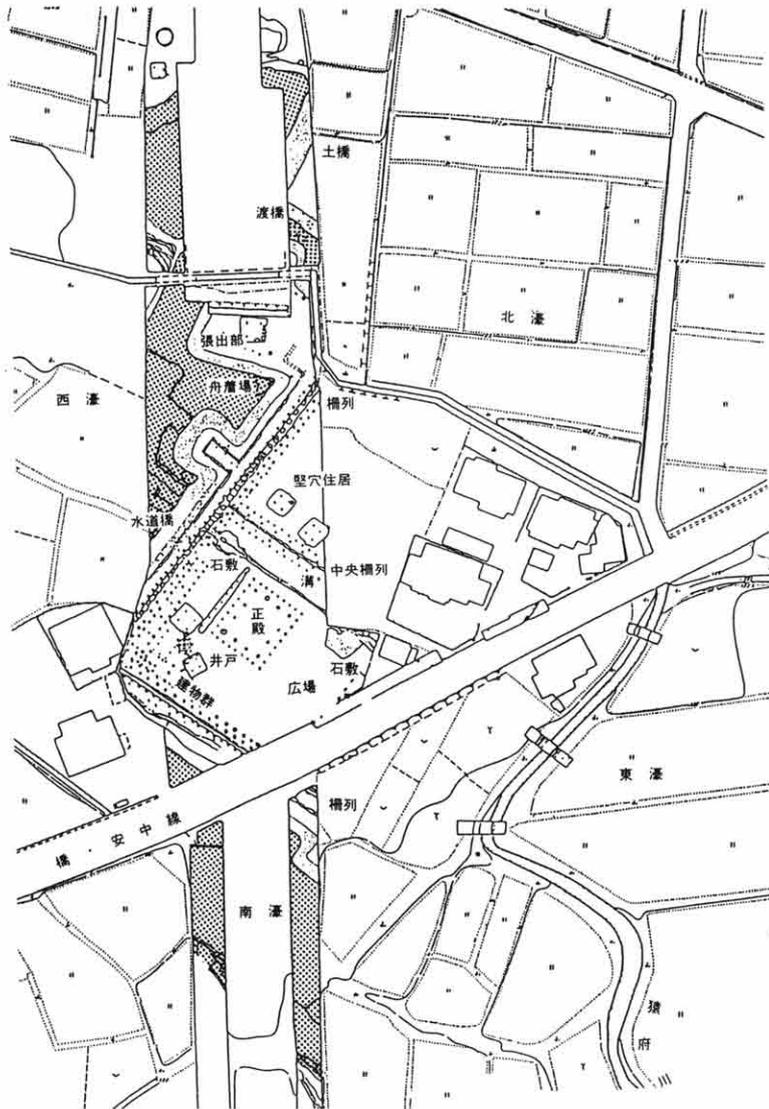
最後に、東日本における古墳時代中期の事例(第5図)を概観しておきたい。群馬県三ツ寺遺跡は、現在確認されている首長の居館の中では最も規模が大きく、自然地形を巧みに利用し、人工的な運河を四方に配置することによって居館部分を完全に隔絶している。特に、古墳の葺石と技術的にも共通要素を多くもつ石積みは、居館であることを知らしめる上で視覚的に有効である。

一方、内部は、2条の溝により区画されており、正殿域と竪穴式住居域に完全に分離されている。これらの空間を独特な宗教的な空間として捉える意見も見られる。

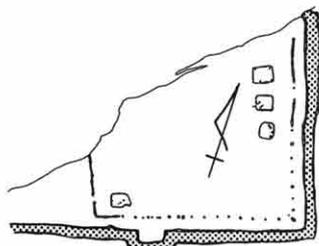
群馬県三ツ寺遺跡は、発見から今に至るまで、典型的な首長居館として評価されてきた。しかし、これほど傑出した規模をもつ居館跡はほかになく、極めて特異な事例として認識する必要がある。

群馬県荒砥荒子遺跡は、39m×57mの区画溝をもっている。外側の溝に沿って、柵列などがめぐっている。内部での掘立柱建物跡は小規模である。群馬県丸山遺跡では、32m×37mの区画の溝の内側に竪穴式住居跡が並んでいる。

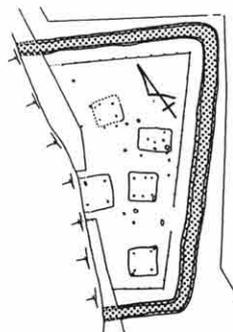
栃木県成沢遺跡では、一边56mの圍繞施設である溝と柵がめぐり、複数の竪穴式住居跡が確認



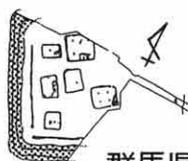
群馬県三ツ寺遺跡



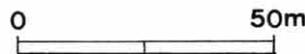
群馬県荒砥荒子遺跡



栃木県成沢遺跡



群馬県丸山遺跡



第5図 古墳時代中期の圍繞施設(東日本)

されている。

以上が、古墳時代中期の圍繞施設をもつ首長居館の概観である。古墳時代前期では、定形化していない圍繞施設が、中期に至り規模や構造的な要素から徐々に共通する施設へと変化していく過程を読み取ることができる。

最後に、これらの圍繞施設が古墳時代後期にはどのように変化するのかについて説明しておきたい。

古墳時代後期に比定できる圍繞施設をもつ集落遺跡は、古墳時代中期と比較しても激増する傾向にはない。また、陶邑編年MT15型式併行期に集落の成立が見られる遺跡と同TK209型式併行期に成立する遺跡では、同じ後期であっても異なる部分が多く見られる。ここでは、6遺跡を概観しておきたい(第6図)。

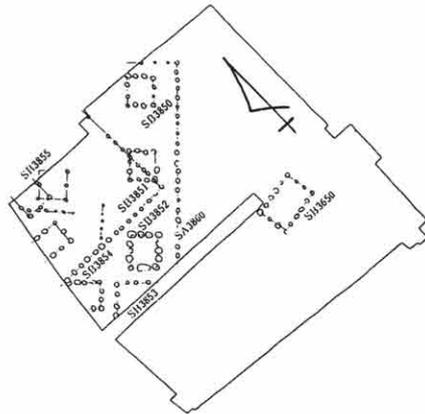
奈良県藤原宮東方官衙下層遺跡は、後

期後半に成立する遺跡であり、50m×80mの柵列内に三間四方の小規模な掘立柱建物跡が配置されている。掘立柱建物跡の配置は、中期に見られる配置とは異なり、その後に見られる律令的な配置に近似している。奈良県上之宮遺跡は、内側に37m×50mの区画溝を設定し、全体的な規模は不明であるが、外側にも区画溝がめぐる。南方に偏った地点に主要施設が存在している。大阪府長原遺跡では、後期前半に集落が成立すると見られているが、区画溝は円形を呈し、区画内には小規模な掘立柱建物跡が認められる。先に見た藤原宮東方官衙下層遺跡とは異なり、前期から中期の首長の居館の構造的特徴を残している。

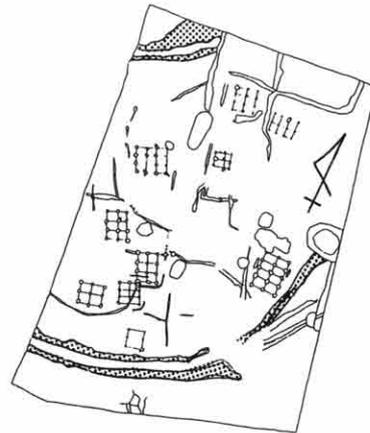
一方、大阪府伽山遺跡は、33m×42mの圍繞施設内に掘立柱建物跡が規則的に配置されている。その配置の状況は、藤原宮東方官衙下層遺跡と同じく、律令的な様相が見られる。

福岡県比恵遺跡では、飛鳥時代においても存続することが確認されており、その配置を律令的な要素として捉えることもできる。

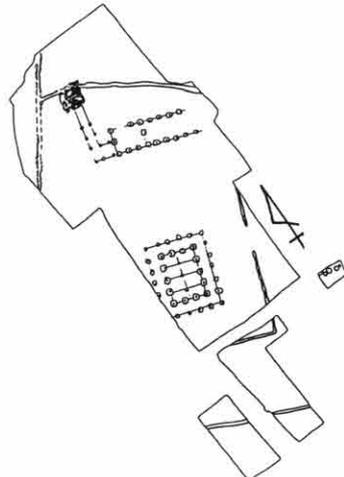
最後に、広島県大宮遺跡は、隅円の台形状をなす区画溝と溝に沿うように、桁行の長い掘立柱建物跡が確認されている。掘



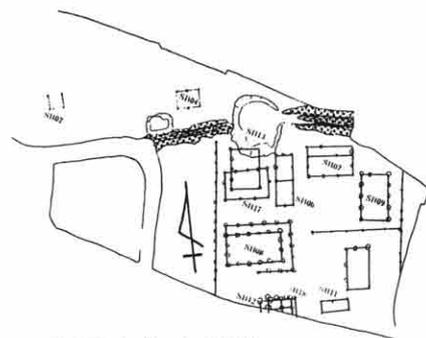
奈良県藤原宮東方官衙下層遺跡



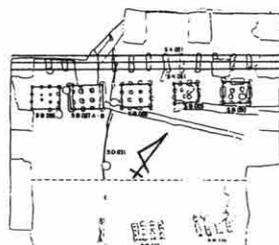
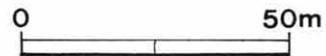
大阪府長原遺跡



奈良県上之宮遺跡



大阪府伽山遺跡



福岡県比恵遺跡



広島県大宮遺跡

第6図 古墳時代後期の圍繞施設

立柱建物跡の構造から、首長の居館ではなく、馬飼に類する施設ではないかと考えておきたい。

以上、見てきたように古墳時代後期になると、中期の様相を残す居館と律令期の初源的形態として認識すべき居館が存在することがわかる。各々の成立する時期によって、構造が異なる可能性があるが、成立する背景を検討することは、居館自体が成立する地域の歴史的環境と深く関係するものと思われる。

4. まとめ

集落を圍繞する施設は、弥生時代中期にはすでに見られる。しかし、それは、環濠集落内の主要施設を圍繞するものであり、古墳時代前期以降に独立する圍繞施設として一部の集落に定着する。しかし、多くの共通要素をもつようになるには古墳時代中期をまたなければならない。

古墳時代中期は、多くの技術をもった渡来人によって生産体制が変革する時期でもあり、首長の居館が、定形化する背景が、土木技術の躍進と無関係ではないと思われる。一方、古墳時代後期には、中期的な要素を残す集落と律令の様相を呈する集落に大別される。古墳時代後期の圍繞施設や掘立柱建物の配置に、律令的な官衙施設の萌芽を認めることができるのである。

本稿では、集落の圍繞施設を中心に概観したが、他の属性を研究することによって古墳時代中期が大きな変革期であることを更に明らかにできると思う。

なお、本稿は平成16・17年度当調査研究センター共同研究「古墳時代集落跡の属性研究＝中期・後期編＝」における研究成果の一部である。本稿を成すにあたり、共同研究員である引原茂治氏には、多くの教示を得た。そして感謝致したい。

(こいけ・ひろし＝当センター調査第2課調査第1係長)

参考文献

武末純一「北九州市・曾根平野の首長層居宅」(『古文化談叢』第18集) 1987

広瀬和雄「古墳時代の集落類型－西日本を中心として－」(『考古学研究』第25巻第1号) 1978

なお、挿図に使用した遺構図の出典については、紙数の関係で割愛した。

あぜち 案察使遺跡出土の縄文土器に関する科学分析

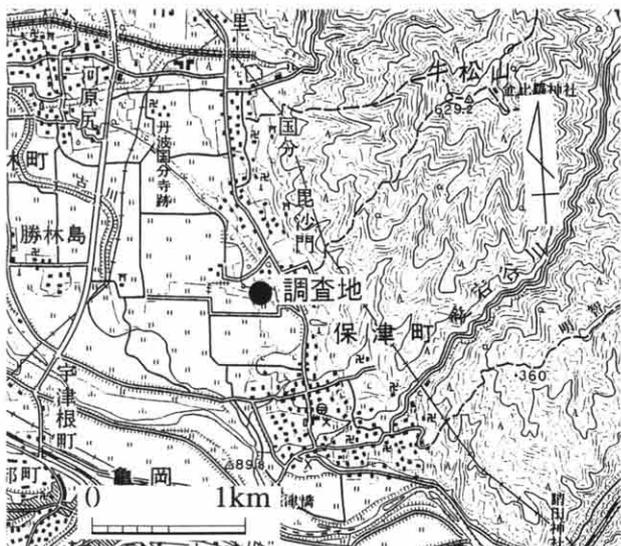
中川 和哉

はじめに

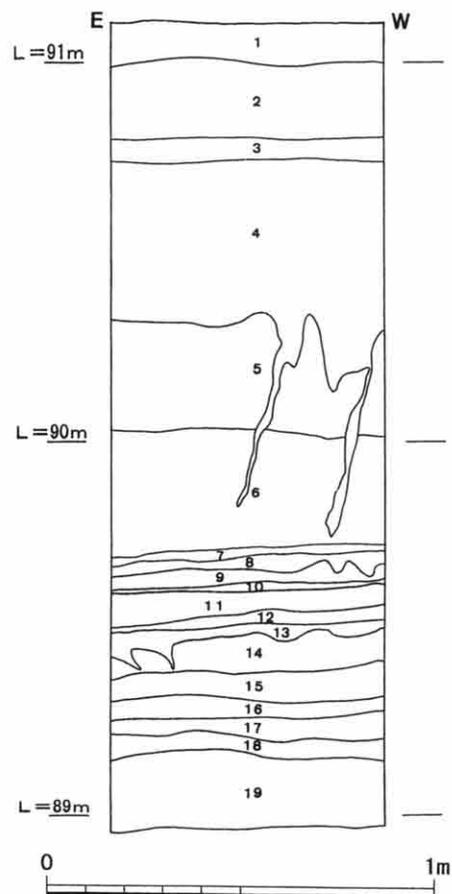
今回紹介するのは、亀岡市保津町に所在する案察使遺跡から出土した縄文土器とその包含していた堆積層に関する科学分析結果である。案察使遺跡は京都府の中央部にある丹波山塊の南辺に位置する亀岡盆地の南部にある。遺跡地は亀岡盆地を貫く桂川左岸の段丘から沖積面にかけて広がる縄文時代から近世までの複合遺跡である。過去6回の調査が実施されており、第4次調査(福島他2003)では弥生時代末の多くの粘土採掘坑と考えられる土坑が検出されている。調査者によるとその遺構検出時に広く火山灰と考えられる堆積物が見られたという。

今回の遺物は第5・6次調査で出土したもので、段丘崖にほぼ沿って作られる道路建設に先立つものである。第5次調査は試掘調査として実施された。調査対象地内にある段丘崖は湧水点になっており、調査中も湧水対策が必要であった。

縄文土器は試掘調査である第5次調査第4トレンチとその地点を拡張した第6次調査第3トレンチから出土している。また、第6次調査第1トレンチからは火山灰層が検出されたが、縄文時代の遺物は出土しなかった。いずれのトレンチも段丘崖の下の部分に当たる地域で火山



第1図 案察使遺跡位置図
(国土地理院1/50,000京都西北部)



第2図 第5次調査第4トレンチ
南壁土層柱状図

灰は検出されている。

1. 基本層序

第2図は、第5次調査第4トレンチの深掘区南壁の土層断面図である。第1層は耕作土、第2層は灰オリーブ色(5Y5/1)砂質土、第3層は礫層で、人為的な堆積の可能性がある。第4層は灰色(5Y4/1)砂質土を基質に黒褐色(2.5Y3/2)のマンガン粒を多く含み、全体は暗褐色を呈している。第6層は黄褐色(2.5Y5/4)砂質土でマンガン粒を含む。第7層はオリーブ黄色粘質土、第8層は緑灰色(10GY6/1)シルト、第9層は緑灰色(5GY5/1)シルトで淡黄褐色の火山灰層を挟む。第10層は黒色(N2/0)シルトで第11層との間には炭の薄層が挟まれる。第11層は暗青灰色(5BG4/1)シルト、第12層は暗青灰色(5B3/1)砂混シルトでこの3～5cmの層の上部には明黄灰色の薄層があり、この層からのみ縄文土器が出土する。なお、この明黄灰色の薄層は木の葉の集積下ものとの分析結果を得た。また、この層には白色のマトリックスとは明らかに異なる粒度の白色の粒が含まれているため、軽石などの可能性を考えたが長石を主体とする粒子であった。第13層は灰色(10Y4/1)シルト、第14層は灰色(10Y5/1)シルトで木質を含む。第15層は暗青灰色(10BG4/1)砂混シルト、第16層は青灰色(10BG5/1)シルト、第17層は緑灰色(10G5/1)シルト、第18層青灰色(5BG6/1)砂質土、第19層青灰色(10G5/1)砂層である。19層以下は湧水のため確認できなかった。

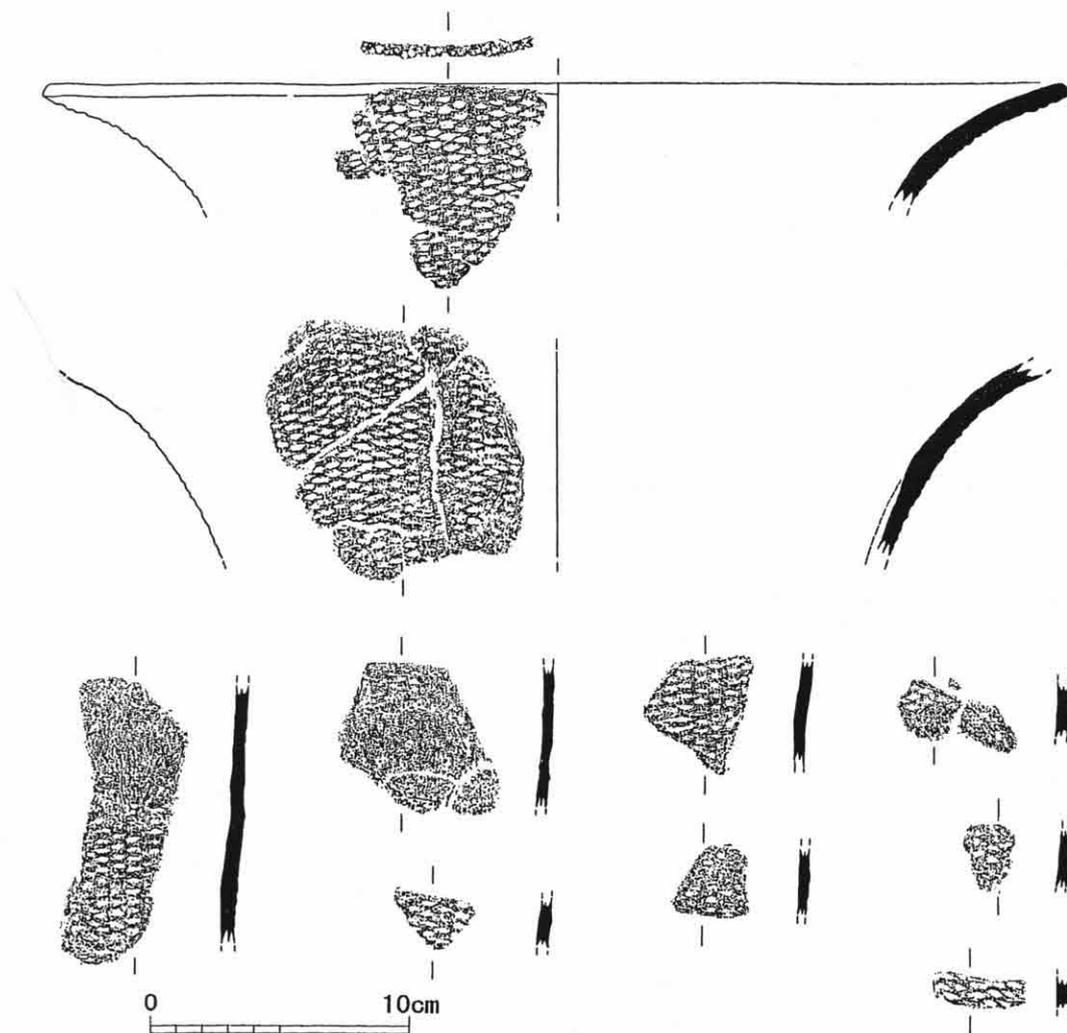
7層以下の層は陸化することなく、水面下で堆積した層であるとの指摘^(注1)があり、それを傍証するように、第9層からは珪藻化石の中でも沼沢湿地指標種群の(*Cymbella aspera*, *Pinnularia viridis*)が検出されている。

2. 出土遺物と胎土分析

出土遺物は、第3図に図示したネガティブな押型文土器のみで、縄文時代早期の大川式土器と考えられる。第3図1・2で見られるように口縁部近くで大きく外反する。器表面は3つが一對をなす原体で施文されており、口縁端面には縄圧痕が施されている。土器には器壁の厚いものと薄いものがあるが原体の共通性と色調から同一個体の可能性がある。また、これらの縄文土器は深掘り地区を中心に直径3m以内で集中して出土している。

縄文土器の胎土中には角閃石黒雲母が肉眼でも確認されるが、「多量の重鉍物を含みかつその組み合わせにおいても主として角閃石・単斜輝石・不透明鉍物・黒雲母からなり、カミングトン閃石を含むという特異性が認められる。少量の火山ガラスも含まれる(中略)。胎土の起源については変成岩の風化あるいはテフラが想定されるが、詳細は不明である。」という京都フィッシュントラックの分析所見が出されている。第1トレンチの弥生時代末の粘土採掘坑と考えられる土坑の粘土や弥生時代の土器の胎土は重鉍物の含有が少なく、アカホヤ火山灰起源のガラスが多く含まれている。縄文土器に含まれる火山ガラスはこれらに見られるガラスに比べ分厚く着色程度も弱い点で起源を異にすると考えられる。

縄文土器が在地のものであるかの確認のため、弥生時代の土器と、粘土採掘により採取したと



第3図 案察使遺跡出土縄文土器

考えられる粘土層の粘土とそれを500℃、600℃、700℃でそれぞれ1時間焼成したテストピースを胎土分析した。これは加熱によって含有物の組成比が変わる可能性があるためである。分析結果は以下のようなものである。

弥生土器の胎土は、「大部分は焼結粒子と軽鉱物(石英・カリ長石・斜長石が主)から構成され、微量の珪長質薄手火山ガラスを含むことが判明した。重鉱物は微量のため定量検討は困難であるが、見かけ上新鮮な黒雲母が検出されることから、焼成温度はあまり高くなかったものと推定される。また、火山ガラスは、形態や色付ガラスの含有など見かけの特徴からアカホヤ火山灰(K-Ah)由来の可能性が高いと推定される。」

粘土は、「多量の珪長質薄手バブルウォール型の火山ガラスが検出された。これはアカホヤ由来と推測される。胎土分析の結果は焼成資料とかなり異なるようにみえるが、これは粘土分が除去されたこと、逆に焼成資料では焼成粒子中に鉄鉱物などが取り込まれた影響によるものと考えられる。」

焼成資料の700℃、600℃のものは明褐色(順に10YR7/4・5YR7/3)を呈し、もとの粘土の黒色がなくなる。火山ガラスが11~13%含まれ熱により変色したのものも多く認められる。変色したガラ

付表1 縄文土器胎土分析結果表

火山ガラス・鉱物組成(モード分析) 注:以下のモード分析値は上段が計数値、下段が含有率%を表示

火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	焼結粒子	合計	備考
3	46	86	-	65	200	火山gl:珪長質bw≒pm型。 軽鉱物:pl・Qz(plはかなり高屈折率のものを含む)。 重鉱物:GHb,Cpx,Opq,Bt主。Cum,Opq,Ap含む。 岩片:一。焼結粒子:黒~暗褐色でPOを少量含む。
1.5	23.0	43.0	0.0	65.0	132.5	

bw:バブルウォール、pm:軽石、sco:スコリア、pl:斜長石、Qz:石英、Kf:カリ長石、chal:カルセドニー、PO:ポントオパール

重鉱物分析(モード分析)

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	3	17	-	148	14	4	-	12	2	200	Btは2個ともみかけ上新鮮だが、気泡を含み熱影響の徴候あるか?
0.0	1.5	8.5	0.0	74.0	7.0	2.0	0.0	6.0	1.0	100.0	

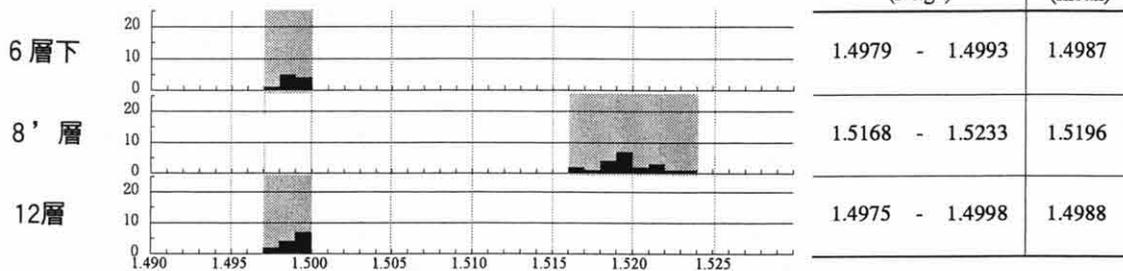
Ol:カンラン石、Opx,Cpx:斜方、単斜輝石、BHb,GHb:緑色・褐色角閃石、Opq:不透明鉱物、Cum:カミンク閃石、Zr:ジルコン、Bt:黒雲母、Ap:アパタイト、Gar:ザクロ石

火山ガラス形態分類(モード分析)

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備考
10	33	8	2	1	15	16	85	+	珪長質bw≒pm型主。85ヶ/1薄片。約60%の個体中にヒ割れあり。Glass wallはK-Ahより厚め。亀ノ甲gl微量。
11.8	38.8	9.4	2.4	1.2	17.6	18.8	100.0		

H:扁平、C:中間型、T:多孔質、It:不規則型、incl:インクルージョン、devt:失透化、RI:屈折率

試料名



第4図 火山ガラスの屈折率測定結果(縦軸:測定粒数、横軸:屈折率)

ス数は温度が高くなるにつれて増える。

500℃のものは灰黒色(10YR2/1)を呈し、黒色のもとになるのは粘土に含まれている有機炭素と考えられる。火山ガラスは11%含まれる。

以上の結果から弥生時代の土器、粘土、粘土を焼成したものにはアカホヤ火山灰が含まれている。このように弥生土器胎土中に高い比率でアカホヤ火山灰が含まれる結果は、八木町池上遺跡(中川ほか2000)での分析結果でも明らかになっている。

また、熱を加えた資料中に見られる重鉱物数を比べると縄文土器の胎土中の重鉱物は飛びぬけ

付表2 年代測定結果

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-41960	試料採取場所 : Azechi site(案察使遺跡) 京都府亀岡市保津町出井	Libby Age (yrBP) : 9,530 ± 60 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -26.72 ± 0.91
	試料形態 : スス 試料名(番号) : NO.1(代替)	$\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -694.7 ± 2.1 pMC(%) = 30.53 ± 0.21
#804	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -695.8 ± 2.1 pMC(%) = 30.42 ± 0.21
		Age (yrBP) : 9,560 ± 60

が多い。前述したようにカミングトン閃石の検出など、肉眼観察で感じた他の資料との違いが明らかになった。亀岡盆地は丹波帯の中にあり、桂川水系に属している。このような地域では案察使遺跡や池上遺跡の弥生土器に見られる胎土が一般的であることから、盆地外の地域からもたらされた土器と考えられる。

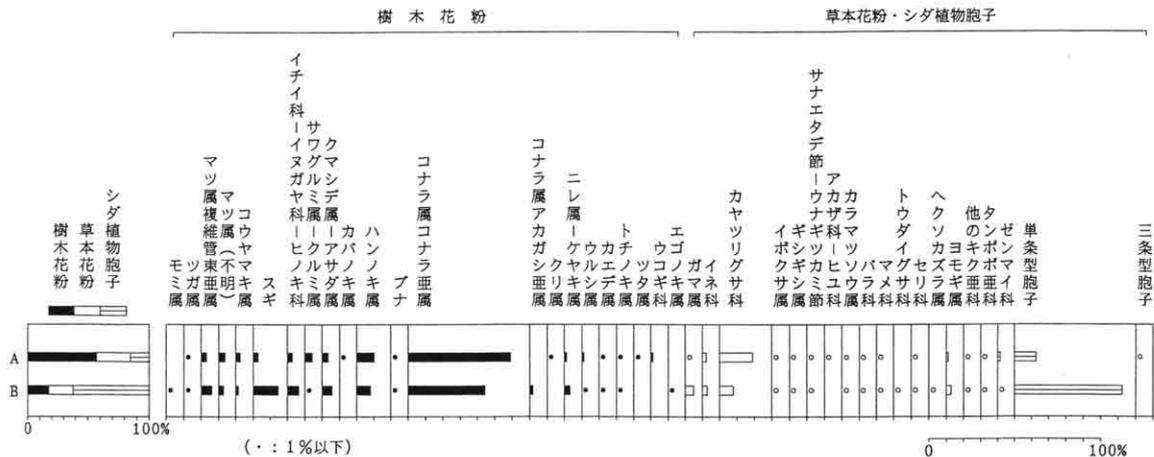
3. 地層の分析

a. 火山灰分析

火山灰層を挟むように13点の火山灰分析を試みた。第7層の上・中・下の3資料、第8層、第9層(火山灰単純層)、第9層、第10~16層がその資料採集層に当たる。パレオラボの分析によると第9層を除きすべての層から若干の火山灰のガラスが検出されている。第7層下と第13層の平板状火山ガラスの屈折率は酷似し、範囲1.4975-1.4998、平均1.499となり、始良Tn火山灰に同定できる。このガラスは分析した各層に少量ずつ認められることから始良Tn火山灰については再堆積と考えられる。

第9層は厚いところでは20cm近くの堆積が認められる層で、比重が軽く粘性がない。柱状の連続サンプリングを行った地点では、第9層のサンプルの中には火山ガラスが検出できなかったが、その堆積状況や長石が多く含まれる特徴から、火山灰、とりわけ風化しやすい火山灰である可能性が考えられ、多量の土を別に取り再度ガラス検出に努めたところ、軽石型火山ガラスが検出できた。このガラスの屈折率は範囲1.5168-1.5233、平均1.520である。この火山ガラスは鬱稜隠岐火山灰と考えられる。鬱稜隠岐火山灰はアルカリ長石を含み、軽石型火山ガラスを持ち、そのガラスは1.518-1.524の範囲の高い屈折率を持つ(町田・新井2003)。噴現地は韓国鬱稜島であり、本遺跡のように厚い堆積が認められるのは京都府内では稀である。噴出年代は福井県水月湖の堆積物に認められる年縞の研究(福沢1995)から約10,700年前の年代が得られている。なお、アカホヤ火山灰については第3トレンチ内で火山ガラスが検出されていないことから、分析した地層(7層以下)はアカホヤ火山灰降灰以前の堆積物である可能性が高い。

第1トレンチで検出した第9層よりも粗粒の火山灰状の堆積物についてはアカホヤ火山灰であることが、京都フィッシュン・トラックの胎土分析に伴う土壌分析の過程で明らかになった。



第5図 案察使遺跡の花化石分布図(Aは第8層、Bは第12層)

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

b. 放射性炭素年代測定

出土した縄文土器の器表面には、炭化物が付着していた。その炭化物を直接測ることによって、土器そのものの年代を出すことが可能であるため、分析の委託をした。その結果9,530±60yrBP (IAAA-41960)の年代が出ている。上記しているように、縄文土器は鬱稜隠岐火山灰の下位から出土しており、精度が高いとされている年縞によって出された約10,700年前の年代より古いことが確実である。AMSを用いた分析との年代差が千年以上認められる。原因の1つとしては、縄文土器から資料をサンプリングする際のヤングカーボンによる汚染が想定できる。

c. 花粉分析

縄文土器が用いられていた時期の植生を知るため、また、火山灰降灰時期の傍証のため、縄文土器出土層準の第12層と火山灰直下の第9層について花粉分析を行った。

その結果(第5図)は、パレオ・ラボ鈴木茂氏によると以下のような植生が復原できる。「両資料ともにコナラ亜属が多産しており、この時期の遺跡周辺丘陵部には斜面部を中心にこのコナラ亜属にクマシデ属-アサダ属、ニレ属-ケヤキ属、ウルシ属、カエデ属、トチ属などを混じえた落葉広葉樹林が広く成立していたと考えられる。また、スギやニヨウマツ類、ヒノキ類といった温帯性針葉樹林もこの丘陵部の一部に形成されていたと推定される。一方、比較的多く検出されているハンノキ属は湿地林を形成する主要な樹木であることから、遺跡周辺の湿地や河川周辺の湿地や河川周辺などの地下水位の高い低地部にサワグルミ属-クルミ属とともに多く生育していたと推定される。

草本植生について、草本の占める割合が低いことから草本植生は比較的貧弱であったと推測される。その中、ガマ属やイボクサ属などの水生植物が検出されており、ハンノキ属やサワグルミ属-クルミ属の生育が推測された湿地や河川周辺などに生育していたとみられる。また、イネ科やギシギシ属、カラマツソウ属、トウダイグサ科、ヨモギ属、シダ植物なども湿地や河川の土手部を中心に分布していたと考えられる。」

付表3 産出花粉化石一覧表(Aは第8層、Bは第12層)

和名	学名	A	B
樹木			
モミ属	<i>Abies</i>	-	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	1
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	7	13
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	9	6
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	6	3
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	7	31
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.- C.	7	14
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	10	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	8	12
カバノキ属	<i>Betula</i>	2	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	24	17
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	1	2
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	138	94
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	4
クリ属	<i>Castanea</i>	1	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	3	7
ウルシ属	<i>Rhus</i>	3	1
カエデ属	<i>Acer</i>	1	2
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	1	2
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	1	-
ウコギ科	Araliaceae	3	-
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	-	1
草本			
ガマ属	<i>Typha</i>	1	58
イネ科	Gramineae	9	36
カヤツリグサ科	Cyperaceae	77	94
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	1	1
ギシギシ属	<i>Rumex</i>	1	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	3	3
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	2	1
バラ科	Rosaceae	3	4
マメ科	Leguminosae	3	2
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	-	1
セリ科	Umbelliferae	1	1
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	5	32
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	4	3
シダ植物			
ゼンマイ科	Osmundaceae	6	1
単条型孢子	Monolete spore	52	747
三条型孢子	Trilete spore	3	-
樹木花粉			
樹木花粉	Arboreal pollen	233	212
草本花粉	Nonarboreal pollen	113	241
シダ植物孢子	Spores	61	748
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	407	1201
不明花粉			
不明花粉	Unknown pollen	32	24

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

小 結

以上のような科学分析によりわかったことを再びまとめたい。縄文土器の年代は火山灰分析の結果、10,700年より古いことがわかった。ネガティブな押型文土器の年代が10,000年前を遡ることは、福井県の鳥浜遺跡で確認されているが、今回の調査によって追認することができた。

縄文土器の使われていた時、この遺跡は、ある程度の深さを持つ湖沼であり、岸に近接した場所ではなく、陸化したことはない堆積学的な見地から考えられている。傍証するように沼沢湿地であったことを示す珪藻化石が検出されている。土器には流水による磨滅が認められず、おこげと考えられる炭化物が器表面に残されていた。また、出土箇所も限られていた。包含層の粒度も細粒で土器を流すほどの営力はなかったものと考えられる。これらのことからこの土器は舟などから投げ入れられたか、誤って転落したものと想定される。土器とは別に粒度的に自然には含まれるはずのない拳大の礫や大型の板状礫などが出土しており人為によるものと考えられる。

この湖沼の周りにはガマ属やイボクサ属などの水生植物が生え、土手には草や食物として利用できるサワグルミ属-クルミ属があり、丘陵にはコナラ亜属を中心とする落葉広葉樹林が多く広がっていた。

土器は胎土分析の結果、丹波帯の分布する地域外からもたらされた可能性が高いことがわかり、通常このような胎土は生駒山西麓のものとしてされている。角閃石を在地の土器に混ぜた可能性も指摘できるが、火山ガラスの種類や含有程度から見て、粘土そのものも在地のものである可能性は低い。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

注1 増田富士雄当調査研究センター理事(京都大学大学院理学研究科教授)の御指摘による。

参考文献

中川和哉他 2000「池上遺跡第5次調査概要」『京都府遺跡調査概報』第91冊

中川和哉他 2005「案察使遺跡第5・6次調査」『京都府遺跡調査概報』第116冊

福島孝行 2003「案察使遺跡第4次調査」『京都府遺跡調査概報』第108冊

福沢仁之 1995「天然の「時計」・「環境変動の時計」としての湖沼の年縞堆積物」『第四紀研究』34.

町田洋・新井房夫 2003『新編 火山灰アトラス』 東京大学出版会。

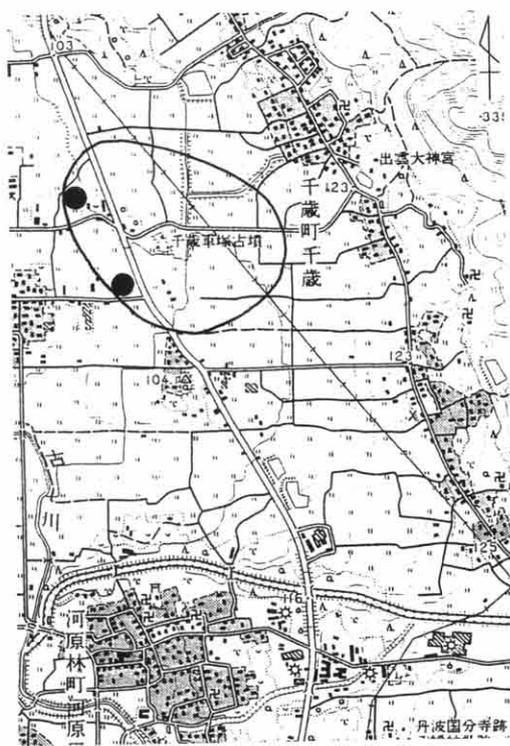
くるまづか 1. 車塚遺跡第7次(A・B地区)

所在地 亀岡市馬路町吉備・小弥ヶ谷
調査期間 A地区：平成16年12月13日～平成17年3月4日(B地区の一部含む)
B地区：平成17年4月7日～5月30日
調査面積 A地区：1,090m²
B地区：480m²

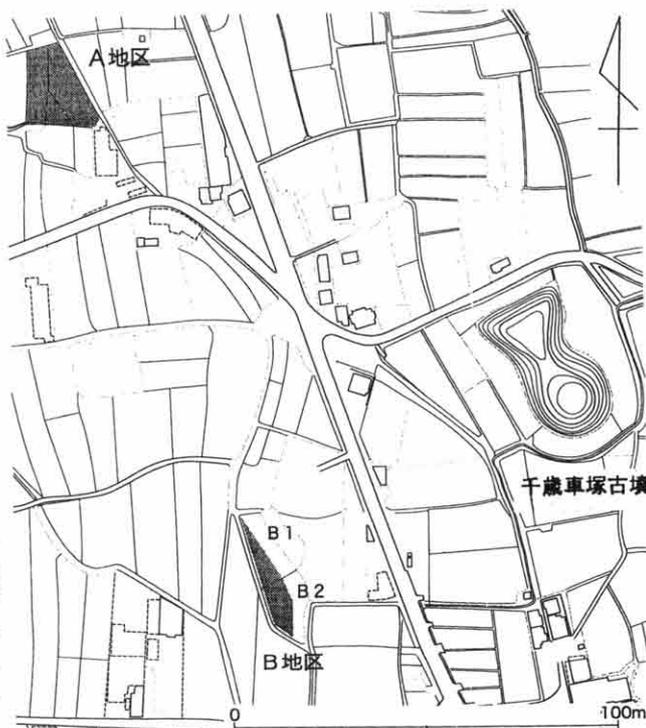
はじめに

車塚遺跡は南丹波地方で最大級の前方後円墳、千歳車塚古墳(後期)を中心に、南北約700m、東西約700mに広がる集落遺跡である(第1・2図)。調査の結果、多くの遺構・遺物を検出した。今回の調査はA・Bの2地区で実施した。

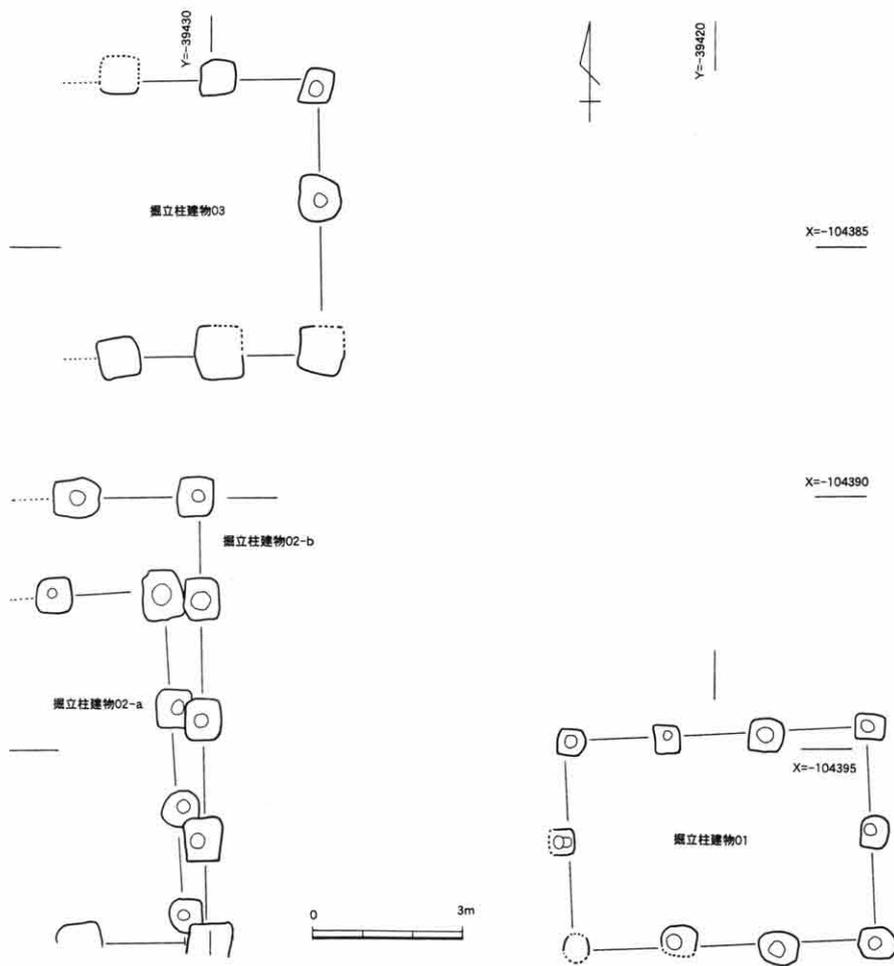
A地区では、弥生・古墳・奈良時代の遺構・遺物が、B地区からは、古墳・飛鳥時代、さらに中・近世の遺構に加え、大量の縄文土器が包含層より出土した。およそ4000年前の縄文時代後期以降、当地における人々の足跡は絶えることなく続いていた。弥生～奈良時代にかけての墓域・居住域・官衙といった土地利用の変遷と、そうした開発の過程で廃棄された大量の縄文土器や石器の出土状況を確認したことが今回の調査成果である。



第1図 調査地位置図
(国土地理院1/25,000亀岡)



第2図 車塚遺跡第7次A・B地区トレンチ配置図



第3図 車塚遺跡第7次掘立柱建物跡群平面図

調査概要

(1) A地区

A地区では、弥生時代の方形周溝墓2基、古墳1基(車塚2号墳)と竪穴式住居跡1基、奈良時代の掘立柱建物跡3棟のほか、溝・柱穴などを検出した。

掘立柱建物跡01

調査区の南部で検出した東西棟の掘立柱建物跡で梁行2間(4.2m)、桁行3間(6m)の規模となる。建物の主軸は真北を基準にN3.5°Wである。この掘立柱建物跡の柱穴は一辺が60cmのもので、柱

の直径20~25cmのもので使われていた。柱穴からは、須恵器や瓦が出土した。位置関係や建物の主軸方位からみて、後述する掘立柱建物跡02-aと同時期に建てられたものと推定される。

掘立柱建物跡02 調査区の南部で検出した南北棟の掘立柱建物跡で、先行する掘立柱建物跡02-aと建て替え後の掘立柱建物跡02-bとがある。掘立柱建物跡02-aは梁行2間(4.8m)、桁行3間以上(6.9m)の規模となる。また、建物の主軸は真北を基準にN3.5°Wである。掘立柱建物跡02-bは梁行2間(4.8m)、桁行4間(9m)の規模となる。主軸は真北を基準にN1°Wである。この掘立柱建物跡の柱穴は一辺が80cmもある大型のもので、柱も直径30~35cmのもので使われていた。柱穴から須恵器・瓦が出土した。

掘立柱建物跡03 調査区中部西寄りで検出した東西棟の掘立柱建物跡で、梁行2間(5.4m)、桁行2間以上の規模となる。建物の主軸は真北を基準にN1°Wである。この掘立柱建物跡の柱穴は一辺が0.8~1.0mもある大型のもので、柱も直径30~35cmのもので使われていた。建物の主軸の方位が一致することや、柱穴などの規模が類似することから、掘立柱建物跡02-bと同時期に建てられたものと推定される。

小結 A地区では、弥生時代に方形周溝墓が営まれた後、古墳時代に古墳が築造され、墓地

としての土地利用が続いた後、奈良時代にはいると掘立柱建物が営まれ、居住域となったことが明らかとなった。掘立柱建物跡は、その主軸方位などから、掘立柱建物跡01と掘立柱建物跡02-a、掘立柱建物跡02-bと掘立柱建物跡03がそれぞれ同一時期のものと考えられ、遺構の切り合いから前者が後者に先行することが推測される。なかでも後者の建物は柱穴の大きさなどから単なる一般集落とは考え難く、何らかの官衙的性格を有したものと考えられる。官衙としての性格は不明であるが、掘立柱建物跡01出土の瓦が三日市瓦窯産である可能性が高いことから、三日市瓦窯と何らかの係わりが推定される。

(2) B 地区

B地区では、現代の畦をはさんでB1とB2の2か所のトレンチを設けて調査を行った。検出遺構には、古墳時代前期の竪穴式住居跡1基、これと重複して検出した飛鳥時代の竪穴式住居跡1基、鎌倉時代の柱穴群や近世の溝などがある。

層序をみていくと、耕作土直下に暗褐色土の堆積があり、須恵器や緑釉陶器などが出土した。さらにその下層には黒色土が厚く堆積しており、中から須恵器片なども出土するが、量的には縄文土器が多数をしめる。黒色土は、旧地形のゆるやかな落ち込みに堆積したものである。この黒色土層より下位に飛鳥時代の竪穴式住居跡が切り込んでいる。

遺構ではまず、飛鳥時代の方形竪穴式住居跡(4.3×4.5m)がある。残存状況の良好な竈を北西辺の中間部に備え、床面では4本の支柱穴、土坑なども確認した(第4図)。出土土器には須恵器杯、土師器甕などがある。この住居跡に切り合ってもう一基の竪穴式住居跡を検出した。部分的な検出にとどまったが、古墳時代(布留式併行期)の甕細片が出土した。

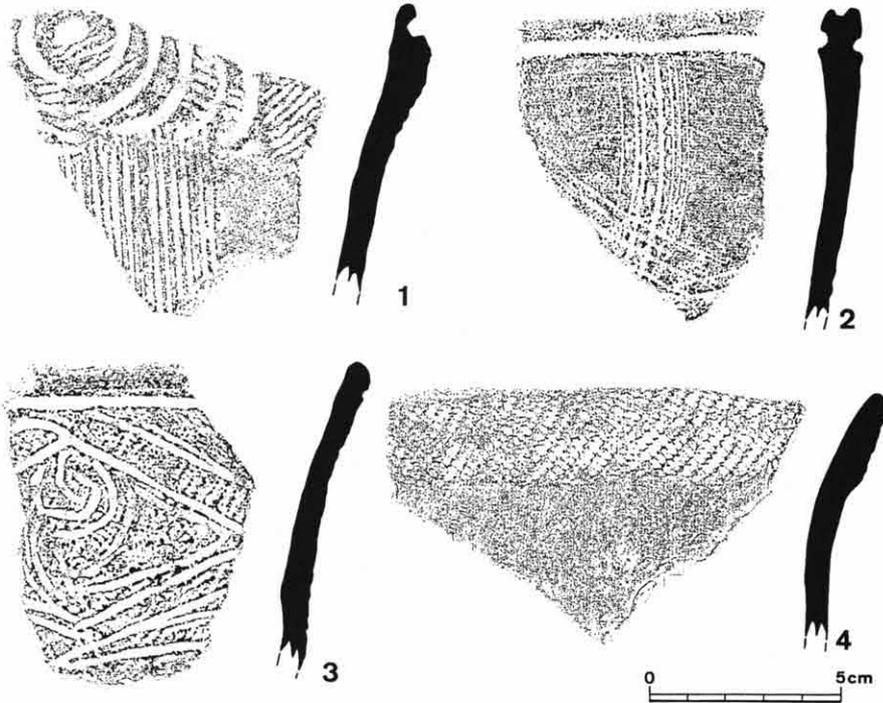
そのほか中世の柱穴群については、掘立柱建物跡を構成していたとみられるが、建物の抽出はかなわなかった。近世の溝は、18世紀の播鉢などの破片が出土し、灌漑や地割に伴うものと考えられる。

遺物については、黒色土から出土した大量の縄文土器および石器が注目される。出土状況はB1・2両トレンチでみられるが、B2トレンチの中央やや東寄りの部分から圧倒的に多く出土した。時期的にもまとまっており、縄文時代後期の北白川上層2式に併行する資料群(約4,000年前)である(第5図)。条痕文、沈線文、磨り消しなどの調整・文様はバラエティに富む。器種には深鉢・浅鉢などのほかに注口土器もみられ、東日本からの影響が窺える。

さらに、これら縄文土器の胎土中に角閃石の包含が観察される破片が多くみられる。石器でも蛇紋岩で作られた磨製石斧が出土している。土器に含まれる角閃石の供給源を生駒西麓方面とし、蛇紋岩を北陸方面とするならば、縄文時代社会の集団間の交流と物の交



第4図 B地区飛鳥時代竪穴式住居跡検出状況(南から)



第5図 縄文土器拓影(北白川上層2式)

易がかなり広範囲に行われていたことを示している。

石器には磨製石斧のほか、打製石斧、石鏃、石錘、敲石、磨石、楔形石器、剥片、石核などがある。定形的な製品に比較し、剥片の量的な多さから、当地点で石器製作作業が行われていたものとみられる。

小結 B地区で

は、古墳時代と飛鳥時代の竪穴式住居跡などの遺構に加え、多量の縄文土器の出土をみた。

亀岡盆地のみならず、京都府全体でもこれほどまとまった量の縄文土器の出土は珍しく、貴重なものといえる。時期的には、縄文時代後期(北白川上層2式)に属する土器群で、深鉢・注口土器などの器形がある。胎土中に角閃石を含むものが多く、生駒西麓地域との交流が窺える。石器も石鏃、磨製石斧をはじめ出土点数は多い。

これらの土器・石器は、残念ながら遺構に伴うものではなく、旧地形のゆるやかな落ち込みの中に再堆積したとみられる土層からの出土で、原位置をとどめるものではない。しかし、観察結果からみて、土器表面の磨耗はあまりなく、それほど遠方から移動してきたものとは考えられない。調査地東側の一段高い段丘上に、これらの遺物を製作・使用していた集落が存在した可能性が高いと考えている。今後、隣接地および周辺地域における縄文時代の遺物の散布状況に注意が必要であろう。

まとめ

以上、今回の車塚遺跡の発掘調査では、出土遺物や検出遺構から、およそ4,000年前の縄文時代後期以降、当地における人々の足跡が絶えることなく、連綿と続いてきたことが明らかとなった。中でも、大量に出土した縄文時代後期の土器や石器は、今後、府内の縄文土器研究に欠くことのできない良好な資料となった。また、弥生～奈良時代にかけて、墓域、居住跡として土地利用されたことが明らかとなった。特に、奈良時代の建物は大型で、官衙的な性格を有していた可能性が考えられるものであった。

(引原茂治・黒坪一樹・福島孝行)

103. 園部城跡 (園部陣屋跡)

園部城のある船井郡園部町は丹波山塊の中の小さな盆地を中心にした城下町である。今回紹介する城は、小出吉親により元和7(1621)年に建てられた近世城郭である。

小出氏は、長野県伊那郡小井出の出身とされ、後に愛知県愛知郡中村に移り住んだとされている。小出秀政は、豊臣秀吉の母の妹を妻に向かえ、秀吉の家臣として活躍した。天正13(1585)年大阪の岸和田三万石の城主となり、長男吉政も竜野城主を経て出石六万石の城主になる(1594年)。関ヶ原の合戦では西軍についたが、秀政の次男秀家が東軍に組し、本領を安堵された。秀政の死後は吉政が岸和田城、その子吉英が出石城主になったが、慶長18(1613)年の吉政の死によって、吉英が岸和田城主、その弟の吉親が出石城主となった。大坂夏の陣の後、吉英は旧領の出石へ、吉親は園部二万九千石に転封された。

園部城は、吉親時代には前身となる城はなく、足掛け3年の仮住まいの後、園部城に入城した。園部城の普請は酒井讃岐守に諸事を相談していたが、吉親の櫓建設の意向に対して二重の堀をもち、堀に狭間もあるので見合わせたほうが良いと助言された。そのため櫓はなく園部陣屋として位置づけられる。

小出氏はその後、寺社奉行や若年寄、京都所司代などの要職を勤めていたが、幕府の体制が危うくなり、京都の治安が悪くなってきた文久3(1863)年から慶応4(1868)年まで大規模な城の改築が行われ念願の櫓を上げ名実ともに城になった。この改築は緊急時に天皇を迎えるためのものとも、宮城守護のためとも言われているが、明治5(1872)年に廃城になった。

現在、本丸跡は、京都府立園部高等学校の敷地になっている。敷地内には幕末に作られた櫓門と巽櫓およびそれに取り付く城壁が残され、高校の施設として利用されている。これらの建物は高校敷地外からも実際に外観をみる事が可能である。また、太鼓櫓が明治4年の廃藩置県の直後、船井郡八木町の安楽寺に移築され、現存している。

発掘調査では、本丸地区から城に



第1図 園部城跡位置図(国土地理院1/50,000園部)

伴う石組みの溝や土坑などが検出されており、伊万里・唐津・備前・丹波・京都・美濃・瀬戸の国内陶磁器のほか、明代の青磁が出土している。郭部分の調査では、17世紀前半の土師皿や鍋島焼の大皿などが出土している。

また、本丸地域では2基の方墳が発見されており、5世紀中～末頃の埴輪が出土している。

園部城旧敷地内には、園部文化博物館があり、城の絵図や江戸時代の関連資料が展示されており、よりいっそう園部城について知ることができる。そのほかの主要な展示品には、町内出土の弥生土器のほか、古墳時代初頭の黒田古墳出土遺物(京都府指定文化財)、古墳時代前期の垣内古墳出土遺物(重要文化財)などがある。あわせて見学されることをお勧めしたい。

開館時間は午前9時～午後5時、休館日は、月曜と年末年始(12月25日～1月5日)で、ホームページアドレスは、<http://www.smc.town.sonobe.kyoto.jp>である。

園部城へは、JR嵯峨野線(山陰本線)園部駅下車、西口から京都交通バス「園校前」下車。自動車の場合、京都縦貫自動車道「園部」インターから約5分、国道9号線の「園部公園」の案内標識を目印にしてください。

(中川和哉)

参考資料

園部町教育委員会編 1998 『社会科副読本 園部の歴史』

引原茂治 1982 「園部城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第4冊

鶴島三壽他 1988 「園部城跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第28冊

黒坪一樹 1996 「園部城跡第4次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第70冊



第2図 園部城の櫓門と翼櫓

センターの動向(05.05～07)

1. できごと
5. 9 内田山古墳・内田山遺跡(第6次)(木津町)発掘調査開始
- 10 岡ノ遺跡第4次(福知山市)発掘調査開始
- 13 諸畑遺跡第4次(八木町)発掘調査開始
- 16 職員人権研修(於：当センター)
- 18 上安久城跡(舞鶴市)発掘調査開始
- 20 車塚遺跡第7次B地区(亀岡市)現地説明会
- 21～22 日本考古学協会総会(於：東京都)福島孝行調査員出席
- 23 長岡京跡右京第851次(長岡京市)発掘調査開始
蔵垣内遺跡第4次(亀岡市)発掘調査開始
- 24 京丹後市史跡整備委員会(於：京丹後市)森下衛調査第1課長出席
- 25 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 26 椿井遺跡第2次(山城町)関係者説明会
- 30 車塚遺跡第7次B地区発掘調査終了(4.7～)
椿井遺跡第2次発掘調査終了(4.18～)
6. 7 監事補助監査
- 9～10 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：富山県)増田耕造常務理事・事務局長、安田正人総務課長出席
- 14 監事監査
- 16 京都府企業内人権問題啓発セミナー(於：京都市シルクホール)水谷壽克調査第1課課長補佐、杉江昌乃総務係長参加
- 22 第74回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、増田耕造常務理事・事務局長、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、上原真人、宮野文穂、下田元美(代理山本参事)、小池久各理事出席
長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 27 園部城跡第7次(園部町)発掘調査開始
7. 5 宮津城跡第12次(宮津市)発掘調査開始
- 8 平成17年度第1回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主催者会議(於：ルビノ京都堀川)増田耕造常務理事・事務局長、森下衛調査第1課長、長谷川達調査第2課長、小山雅人調査第2課総括調査員、水谷壽克調査第1課課長補佐、奥村清一郎調査第2課課長補佐出席
- 20 人権大学講座(於：京都市)杉江昌乃総務係長出席
- 22 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：当センター)小山雅人調査第2課総括調査員、辻本和美資料係長出席
- 12～26 埋蔵文化財発掘技術者専門研修

- 「地方官衙遺跡調査課程」(於：独立
行政法人文化財研究所奈良文化財研
究所)引原茂治主任調査員参加
- 27 長岡京連絡協議会(於：当センタ
ー)
- 28 上安久城跡(舞鶴市)現地説明会
- 30 諸畑遺跡第4次(八木町)現地説明
会



上安久城跡現地説明会風景

編集後記

地球温暖化の影響か、夏の暑さは年々きびしくなっていくように感じます。今年の夏も、発掘現場では、炎天下のもと、熱中症対策に追われる調査員の姿がありました。

現在の私たちも昔の人々と同様に、四季の移ろいに応じて生活スタイルを変えて行きますが、発掘調査で見つかるさまざまな遺物のなかに、季節感を感じさせるものがどれくらいあるのだろうか、と、蝉時雨を聞きながら、ふと考えてしまいました。

(編集担当=辻本和美)

京都府埋蔵文化財情報 第97号

平成17年 9月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER